始

特 233
270

創刊六十五年

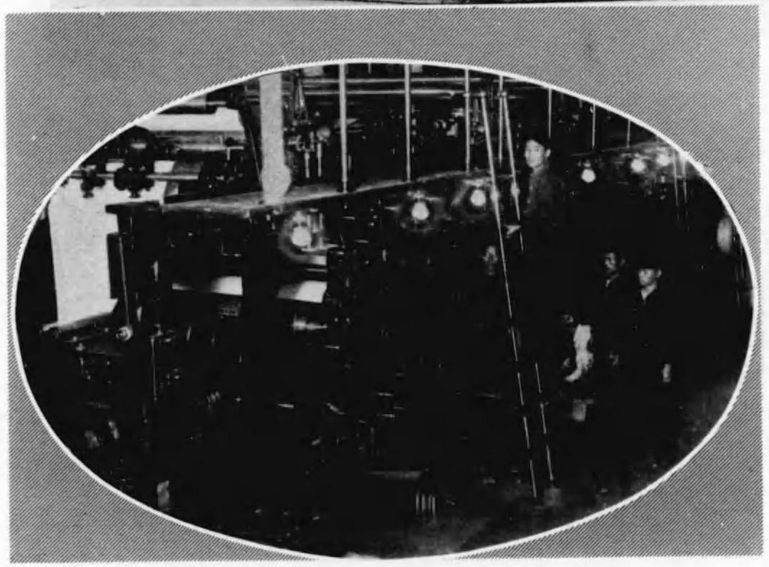
報知新聞小史

報知新聞社

帝國圖書館藏

社長　野間清治

本社社屋



報知式超高速度輪轉機

創刊六十五年

清く明るく正しく

本社屋上の鳩舎

本社羽田格納庫

目次

巻頭に……一―四
藥研堀時代（明治六年―明治二十六年）……六―三四
三十間堀時代（明治二十六年―明治三十八年）……三四―五五
丸ノ内時代（明治三十八年―）……五五―
最近の五ヶ年間……九〇―九四
現況の概要……九四―九九
報知診療所と安信部……九九―一〇二
記念事業……一〇三―一〇六

口繪

社長　野間清治

本社社屋と報知式超高速度輪轉機

本社屋上の鳩舍と羽田飛行機格納庫

報知新聞小史

卷頭に

光輝ある我『報知新聞』は、明治五年六月一日（陰曆五月）東京日本橋横山町の書肆泉屋を版元として呱々の聲を揚げた。爾來號を重ぬること實に二萬一千三百四十四號（昭和十一年六月一日）、正に六十五年の記念日を迎ふるに至つたのである。

この間、小西義敬、栗本鋤雲、藤田茂吉、矢野文雄、阿部興人、箕浦勝人、三木善八、添田壽一、町田忠治、大隈信常、野間清治の諸氏を社長として戴き、常に輿論を指導し、社會の木鐸として其の任務を果し、親切と正確と機敏とを旗じるしとして、日本の新聞界の先登に立ち發展し來つたことは、天下の認むる所、社員一同、此の誇と傳統との上に、新なる勇猛心を奮ひ日夜肝膽を碎いて、『清く、明るく、正しき』新旗幟の下に邁進しつゝある。

明治五年創刊當時の本紙は、驛遞頭前島密氏に依つて計畫された關係上『郵便報知新聞』と

題し、半紙六枚綴の木版刷、毎月五回發行の小冊子であつたが、越えて六年、日刊と爲り、十年四頁に改め、二十三年年中無休とし、二十七年六頁と爲り、發行部數に於て遂に東洋第一の榮位を贏ち得るに至つた。

故大隈重信侯と報知新聞との關係は、今更玆に喋々する迄もないが、其他に『大報知』雑設の歴史の中には、幹部並に記者として大井憲太郎、古澤滋、牛場卓造、岡敬孝、佐久間鐵園、小栗貞雄、犬養毅、尾崎行雄、原敬、森田思軒、田川大吉郎、村井弦齋、廣瀬永太郎、上遠野富之助、正木照藏、朝比奈知泉、加藤政之助、中野武營、圓城寺清、大石熊吉、村上浪六、國木田獨歩、佐藤紅綠、熊田葦城、松井松翁、石川半山、上島長久、村上政亮、大蔵彌太郎、細谷丈夫、北川幾之助、賴母木桂吉、森泰介、篠田鑛造、川島鉞三郎、高田知一郎、太田正孝等の諸氏があり、『報知新聞』は、宛ら人材精錬の坩堝の如き觀があつた。

創刊號

明治二十六年には、京橋三十間堀に移り、同三十八年日露戰爭當時は、丸ノ内の現在の地に轉じ、社運の隆昌、宛然旭日昇天の觀があつた。大正十一年、現在の報知「ビルディング」成り、天祐と社員の努力とに依り、大震災の厄を免れて、焦土の中に新興帝都の更生の氣運を導き、大正十四年、株式會社組織に改め、昭和五年六月、野間社長を迎へて、今日の隆昌を見るに至つたのである。

『報知新聞』の誇りとする所は少くないが、口語體採用、夕刊發行、輪轉機使用、婦人記者採用、職業案内掲載、色刷、地方版創始、寫眞版挿入、家庭欄特設、傳書鳩使用、日曜報知添附婦人子供報知添附、滿鮮版特設、グラフ面特設等は悉く他社に先んじて試み、新聞界に偉大なる時代を劃した事蹟であり、大震災遺米答禮使派遣、日米水上競技大會、汎太平洋水上競技大會、報知診療所創設、征極王アムンゼン氏招聘、浮世繪大展覽會、日獨對抗陸上競技大會、日獨親善歐亞連絡飛行、國寶重要美術品繪畫展覽會、東北凶作地救濟義捐金品募集、第二回國寶重要美術品繪畫展覽會、日米對抗籠球競技大會等は、企畫事業方面に於ける近年の華々しい足跡である。この外大學專門學校驛傳競走、中等學校驛傳競走、古式相撲大會等は、スポーツ界の花も實もある年中行事として年々盛況を加へ、皇太子殿下御

降誕記念報知賞は、社會の德育と文化とに忠實なる貢獻を爲してゐる。

『報知新聞』六十五年の歴史を顧みれば、そのまゝが、單に日本に於ける新聞發達史たるばかりでなく、實に明治、大正、昭和の日本の政治、經濟史であり、社會、文化史であると言はねばならぬ。從つて眞の『報知新聞史』は、數篇の大冊に盛るもなほ足らざるを覺ゆるのであるが、以下年代順にその活躍と發展とをこの小冊子に摘記し、光輝ある六十五年を偲び、更に一層光輝あるべき將來を望む記念としたい。

明治五年…（九月十二日、東京横濱間鐵道開業式）…

驛遞頭前島密氏により創刊さる。『郵便報知新聞』と稱す。

明治五年六月（陰暦五月）は、わが報知新聞が始めて產聲を上げた時である。明治五年は言はゞ新時代の黎明に輝いた年で、維新の基礎も漸く確立して、前年には廢藩置縣が行はれ、この年五月には、戊辰の役に賊名を負うた者も悉く特赦され、九月には東京横濱間に汽車が開通し、暮の十二月には暦法が改正されて太陽暦を用ふる事となり、即ち陰暦十二月三日が、新暦の六年元旦となつた年である。

前島密氏

當時の新知識で驛遞頭（今の遞信大臣）の顯職にあつた前島密氏は、ヨーロッパから歸朝して、あらたに郵便制定規則なるものをつくり、同時に日本橋横山町に郵便取扱所を設けた。そして一方に新聞發行を計畫し、その事を部下である驛遞寮の屬

官小西義敬氏に相談した。小西氏は一議にもおよばず賛成、さらに當時横山町三丁目で書物屋を開いてゐた泉屋事太田金右衞門氏が東京府下の郵便取扱を引受けてゐた關係上、この話をしむけると大に乘氣になり、そこで小西、太田の共同事業で、太田氏が板元となり、板木刷半紙二つ折り六枚綴（初號は表紙共九枚綴）新聞をこしらへ、『驛遞寮檢』といふ印を押し、毎月五同發行、『郵便報知新聞』と銘うち、新貨三錢をもつて市中に發賣された。

明治六年…（十月二十四日、「征韓論」破裂）…

藥研堀に移轉し、日刊とす。

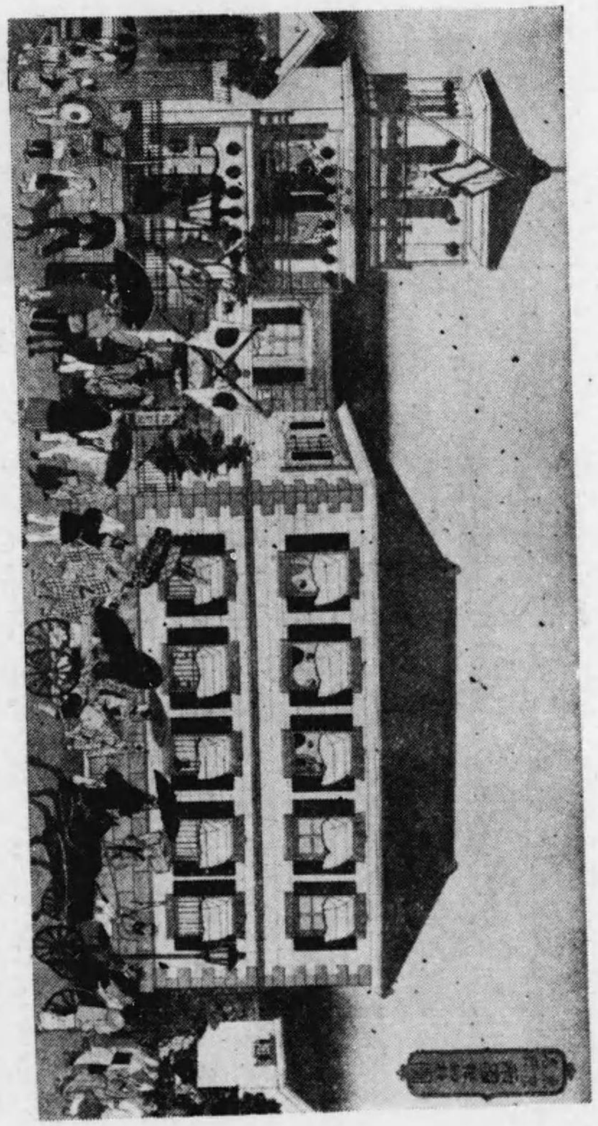
小西義敬氏は兩國矢の倉の名主の息子で、世才にたけ新聞經營には非凡の手腕を有し新味ある人物であつた。新聞が盛んになるにつれ、編輯一切の仕事をしてゐた横山町の泉屋書店では手狹を感ずるやうになつたので、兩國廣小路横町の恭會所の二階を借りうけ、こゝに事務所を移したが、更に不便を感ずるやうになり、藥研堀の大横町から廣小路へ出る通りの家を買ひ、一

小西義敬氏

本立の新聞社が出來引越したが、裏の燒芋屋から出火して全燒、再び横町の恭會所に引越した。小西氏はまもなく、小野組の番頭で政府の爲替方をしてゐた行岡庄兵衞氏の援助を受け、藥研堀三十八番地の私立學校を買取つた。この家は以前角力年寄雷權太夫の住宅で、構造萬端頗る頑丈に出來て居たのに外部を手入れして、窓やその他にハイカラな裝置を施し、編輯室や事務室を設けて、角力の稽古場であつた箇所に印刷機械を据ゑつけ、當時としては堂々たる新聞社の體裁を備へた建物となつた。殊に異彩を放つたのは三階の火見櫓であつた。

木版も活字に改まり、新聞社の前は活版機械の見物などで毎日の人だかり、とにかく東京新名物の一つとなり、當時大流行の東錦繪、しかも三枚つゞきの奇麗な繪に畫かれ、繪双紙屋の店先を大に賑はしたのである。

月五回發行を一躍日刊としたことは非常な英斷であつた。



社知報の代時堀研藥

な的爲尖る頗はて時當の建階三造木」は社知報たつあに堀研藥舗本日
。ため集を氣人の都諸てつなでまに舗鋪にちゃの舗のと」で築建洋西

明治七年…(二月一日、佐賀の亂起る)…

民論の急先鋒となる。四號活字を改めて五號活字の兩面刷とす。

一月、民選議院設立の建白書が提出された。この建白書は前年十月『征韓論』が破裂し西鄕隆盛と共に野に下つた板垣退助、副島種臣、後藤象次郎、江藤新平の前四參議と、由利公正、島本仲道、古澤滋、小室信夫、岡本健三郎等諸氏によつて太政官に提出されたもので、逸早くこれを報道したのは、本紙と日新眞事誌とであつた。同時にこれに對する議論が續々新聞紙上に現れ、政論の火の手が大に揚がることになつたが、當時三大新聞といはれた中の、日々新聞は間もなく政府の御用となり、日新眞事誌は英人ブラックの經營で、日本の輿論を代表するには多少趣を異にしてゐたのと、これも間もなく廢刊したのとで、以來民論の代表としては常に本紙が當る事となり、民權論の急先鋒として終始一貫したのである。

これより先、經營の基礎は漸く定まつたが、さて編輯の方はといふと八方美人の小西氏の才覺

岡　敬孝氏

で、福地櫻痴や、成島柳北や、大槻如電等の諸氏に執筆を賴み、大藏省の役人で、文才のあつた森山氏や、小西氏と同窓の友、岡敬孝氏（元警視總監岡喜七郎氏の義父）やが内にあつて纒める事にしてゐたが、いつまでもそれではいけないといふので、始めて招聘されたのが、當時横濱に居た栗本鋤雲氏である。

鋤雲氏は本姓喜多村、通稱瀨兵衞、別に匏庵と號し、出でて栗本氏を嗣ぎ、幕府の醫官から拔擢され、軍艦奉行、外國奉行に歷任して安藝守と任官して勘定奉行格に進み、函館奉行を兼ねてフランスに特派中、若年寄格にまで進められたが、彼地で維新の變革に遭ひ、歸來孤節を完うして再び官につかなかつた人、舊幕の遺臣として傑出した人物であつた。

栗本鋤雲氏

家學の醫藥本草はもとより、儒學を安積艮齋と佐藤一齋とに學び、また早くフランス語を學んで、幕末外交の大立物となりフランスではナポレオン三世治下のパリに足掛二年滿九ケ月滯在して、つぶさに彼地の文物制度を視察して歸つた當時の最新知識であつたから、新政府は其

材幹を惜んで屢々起用を切望したけれども、頑として應ぜず、名利の念を絕つてゐたが、横濱に遊んで、高島嘉右衞門の宅に逗留中、たま〳〵毎日新聞に執筆してゐた關係から小西氏の招聘を受くるに至つた、時に五十二歲。

當時三田の福澤諭吉氏は、『舊弊破壞』を旗印として盛んに自由民權を主張し、時の保守的政府に向つて極力反對の氣勢をあげてゐた。その主義主張に全然共鳴したのが、舊幕臣でありフランスじこみの新知識であり、且つ明治政府の態度に大不滿をいだいてゐる栗本氏であつた。

栗本氏は入社すると同時に、直ちに三田の福澤氏を訪問し、自分の意志を述べて助力を乞ひ、門下の秀才に、論文の投書方を仆賴した。福澤氏もこゝろよくこれを承諾し、門下生に命じて續々論文を投書さした。後入社した箕浦勝人、藤田茂吉兩氏は、その中の最も勝れたもので、投書學生の原稿料は、學資の補ひにしたといふ。

當時の寄稿家としては、前記の外に大井憲太郎、塚原周造、依田百川の諸氏があつたが、就中政論家として最も異彩を放つた者に『立花光臣』と名乘つた匿名の投書家があつた、これをだん〳〵探つて見ると、近頃英國から歸つて、板垣氏の祕書兼顧問格となつてゐる土佐の古澤滋氏といふ事がわかつたので、早速交渉して入社せしめ。

從來の四號活字を改めて五號活字の兩面刷としたのは五月である。新聞紙の勢力が漸く世に認められると同時に、機を見るに敏なる繪草紙屋が、新聞に掲載された事件を、一枚刷の錦繪に作り、新聞名と掲載の號數と記事を其儘刷り込んで、發行することの流行したのもこの頃で、これは直接新聞社の仕事ではなかつたが、本紙の記事を繪にしたのは、當時浮世繪の泰斗といはれた大蘇芳年氏であつた。

福地櫻痴氏が日々新聞に入つて、御用新聞の看板を掲げたのはこの年十一月で、專ら參議木戸孝允の保守主義を代表したのに對し、本紙は前述の關係から民間側の進歩主義を代表して論戰を交へた。御用紙の方では自ら政府の方針を漸進主義と唱へ、民權論者の事を急進黨と名づけてゐた。荒れ狂ふ時代の激浪の中に、保守主義者(政府派)と進歩主義者(反政府派)とが、二大新聞に據つて連日火花を散す有樣は一大壯觀であつた。實に本紙は當年進歩派の聖地たるの偉觀を呈したのである。

明治八年…(一月十日、大阪會議)…

政府の壓迫來る。口語體を採用す。

大阪會議は、井上參議等のきもいりで開かれたもので、在朝の保守派と在野の急進派との巨頭連が手を握ることゝなり、木戸氏と板垣氏との妥協が成つた。すなはち政府に立法と司法と行政と所謂三權鼎立の機關を設け、立法は元老院、司法は大審院、行政は內閣で掌る事となつて、板垣氏は再び參議に任じ、古澤、大井兩氏も出でゝ官途についたので、本社內にも新たに改革の必要が起り、以前から投書家としての緣故があり、既に慶應義塾を卒業してゐた藤田茂吉、箕浦勝人、牛場卓造の三氏が入社することになつた。

藤田茂吉氏

藤田氏は號を鳴鶴といひ、豐後佐伯の舊藩士で、當時まだ二十三歳の弱冠であつたが、文章氣節共にすぐれ全盛時代の福地

櫻痴氏に對抗して、これを凌ぐの概を示してゐた。牛場氏は三人中の年長で、當時二十六歳であつたが、後に實業界に轉じて山陽鐵道時代に專務取締役を勤めた人、箕浦氏は一番年少で、漸く二十二歳であつた。

木戸氏と板垣氏との妥協は成つても、民權論はます〳〵盛んに、反政府熱はいよ〳〵高まるので、政府はこれが取締を必要とし、從來條文はあつても頗る寛大であつた新聞條例を改正して、六月、十六條及び附則より成る新條例と、八條より成る讒謗律とを發布し、これに觸れた記者に對して體刑を課するといふ壓迫が加はつた。

本紙は壓迫の中に在つて、飽くまで民論を代表して戰ふと共に、着々紙面改善を行ひ、論說以外の記事に言文一致體を用ひたが、新聞は勿論、當時の出版物にこれを試みた最初で、一例をあぐれば左の如きものである。

昨日午後六時半の地震は、出しぬけにヴシンといふ響きがいたして、可なり强うございました。

——八年六月——

明治九年…（十月二十四日、神風連の亂）…

益々猛烈となる政府の壓迫の中に、未だかつて素志を枉げず。

平素は互に論爭して、敵視し合つた各社の記者も、政府の壓迫といふ共同の利害問題に對すると、一致團結の必要を感じ、對應策を講ずる爲、淺草の某旗亭に吳越同舟の協議會を開いたが、これは各新聞社會合の發端である。協議の結果は各社共同して政府の壓制に當る事となつたが、新條例施行の結果は、各社一流の記者が忌諱に觸れて續々禁錮され、中には編輯の首腦が全滅して、新聞紙の發行に差支へるやうな所さへできたので、これではならぬと、各新聞社では、これまで社長、編輯長等が署名したのをやめ、所謂署名人（編輯人）——監獄行き專門——といふものをつくつて對抗し、政府が人を罰する方針を有名無實に終らせた。さうすると政府はまた思案を廻らし、新聞社そのものに對して、制裁を加へることゝし、七月五日の布告をもつて、新聞紙の發行禁止と發行停止の行政處分を課した。

かゝる壓迫の中に、新聞記者の獄に投ぜらるゝもの、前年九人、この年四十名に及び、本紙も署名人であつた岡敬孝氏は二回筆禍を被り、箕浦勝人氏も二ケ月の禁錮に處せられたが、その間にあつて、相重なる迫害に屈せず、なほ毅然として民權論を高唱し、國會開設運動を援助して邁進したのである。

七年から、八、九年ごろの紙面の體裁をみると、四頁の第一面に、太政官布告をのせる『公布』、官吏の辭令をのせる『公聞』、各官廳の記事をのせる『各官廳錄事』の三欄があり、次に『論說』欄があり、第二面、第三面は府下雜事(中央記事)、西京新報、大阪新報、諸縣報知(以上地方記事)、外國新報、小言(論文)、投書(論文)の各欄がある。その中で、標題のあるのは論說ばかりで、他の雜報はことゞ〳〵〇印を記事の上につけて べた〳〵に並べてある、第四面は、今日の相場にひとしい『物價』欄、廣告と同樣の『公告』、『告知』の二欄に別れてゐる。

明治十一年…(二月二十二日、薩軍熊本城を圍む)…

矢野文雄氏入社。犬養毅氏を戰地探訪人(從軍記者)として戰地に派す。博覽會で受賞。

矢野文雄氏

慶應義塾以來、藤田氏の兄事した龍溪矢野文雄氏は、關西に居て前年から折々投書してゐたが、歸來と共に入社して、大いに論陣を張る事となつた。矢野氏は識見あり、人格あり、和漢洋の學問に深く、ことに新聞に對して非常に興味をもつてゐた。

やがて西南役起り、明治天皇京都御駐輦中の出來事であつたから大本營はその儘京都に置かれ、政治の中心が同地に移つたので、矢野氏は自ら京都に出張して重要なる通信を試み、一方には前年來三田協議社の一人として投書してゐた犬養毅氏を入社せしめ、『戰地探訪人』として戰地に特派した。犬養氏は非常な苦辛をなめて戰爭實記を通信し、それが毎號二三段にわたつて掲載され、そのきび〳〵した

犬養毅氏

名文は戰爭通信中の白眉として、大に讀者の好評を博した。城山陷落を報じた犬養戰地探訪人の通信、最後の一節は左の如くである。

戰地直報（第百三回）

（前略）――午前九時偉身便腹の一屍を獲て來り之を檢すれば果して西鄉なり。尋て其首級を獲たり。首は屍の傍に埋め微く頭髮を露す因て之を掘出し遂に桐野等の屍を併せて淨光明寺に集め兩參軍以下諸將校之を檢し同所に埋む。實に明治十年九月廿四日午前十一時也。兵を起して以來八閱月の久きに彌り地を略すること五州の廣に渉る。武も亦多しと云可く、英雄の末路遂に方向を錯まり屍を原野に曝すと雖も戊辰の偉功國民誰か之を記せざらんや。嗟我輩は官軍凱旋の日に歌ひ國家の舊功臣が死せるの日に悲まざる可らず、九月廿五日犬養毅　記。

――十月五日――

九月廿五日鹿兒島發の記事が、十月五日の紙上に掲載されてゐるのである。戰爭と新聞の發達とは密接の關係があつた、本紙はこの年から四頁となり、また同年上野に開かれた第一回內國勸業博覽會には新聞紙を出品し機械場を開放して、龍紋褒賞を授與された。

明治十一年…（五月十四日、大久保內務卿遭難）…

大隈參議との關係始まる。

大隈重信侯

當時薩長を代表して台閣の勢力を二分した長の木戸孝允は、前年五月戰時中病死し、薩の大久保利通は、この年五月刺客の手に倒れたので、政府の中心勢力は、大隈、伊藤、井上の各參議に移り、殊に大隈參議が首席として庶政の改革を計畫したが、兎角武斷派の爲に妨げられて、思ふやうに行かぬとこ

ろから、これはどうしても國民的力を以て進まねばならぬといふ事になり、政府の方から民間に接近して來るやうになつた。

民論を代表した本社は、從來政府の大官などと交際した事もなかつたのが、こゝに始めて大隈參議とも會合して意見の交換をするやうになり、また從來政府の反對側に立つてゐた福澤氏の如きも、政府が民衆政治を尊重するなら加勢してもいゝといふ事になつた。

明治十二年…（七月四日、米國大統領グラント來朝）…

國會開設の請願天下に充つ。

七月廿九日から八月十日まで十餘回にわたり『國會論』藤田茂吉、箕浦勝人同稿』といふ大論述が掲載されてゐる。これは福澤諭吉氏が口述して兩人に筆記させたもので、全國忽ち響の如く呼應し、猛然民間を風靡し、國會開設の請願運動に一段と油を注いだ。

明治十三年…（七月二十日、楠木正成に正一位を贈らせ給ふ）…

矢野、犬養、尾崎諸氏官に在り、藤田、箕浦兩氏社務に當る。

當時の官制は、參議が各省卿を兼ねてゐたが、この年に至つて內閣と各省とを分け、參議の兼任を廢したので、參議省卿の間に大更迭が行はれた。然し各參議にはそれ〴〵政務を分擔させる必要があつたので、大隈參議は依然大藏關係の事項を擔當し、十一年官途に入つた矢野氏は大藏大書記官を以て統計院幹事を兼ね、大隈參議の帷幕にあつて事を用ひた。

進步主義の大隈參議は矢野氏と相謀り、近き將來に國會を開設して政黨內閣を樹立するについては、其の準備として政治上役に立ちさうな人材を取り入れておく必要があるといふので、矢野氏をして三田派の新進を推薦せしめ、犬養、尾崎等諸氏は、太政官內に新設された統計院へ仕官することになつた。

原敬氏

矢野氏が仕官後の本社は、藤田氏と箕浦氏とが專ら事に當り、其間には原敬氏も入社してフランス新聞の飜譯を擔任してゐたが、これは在社の期間が短く、間もなく去つて地方へ出たので、手腕を現す程の機會がなかつた。

明治十四年…（十月二十九日、自由黨結黨式）…

大隈重信參議野に下る。矢野文雄氏等社に歸る。

明治天皇東北北海への御巡幸に供奉して大隈參議不在中、閥族によつて企まれた計畫により、大隈參議は十月十一日歸京の當夜、直ちに辭表を提出して野に下り、矢野氏をはじめ犬養、尾崎等諸氏連袂辭職し、この上は國民を味方として飽く迄政府と戰はねばならぬと、決心の臍を固めると同時に、本社改革の議が持上つた。

明治十五年…（三月十五日、改進黨組織）…

小西氏に代つて矢野氏社長となる。

尾崎行雄氏

本社に歸つた矢野氏等は、創刊以來の經營者たる小西氏の手から讓渡を受け、矢野氏が名義上の社主となつて事實は矢野、藤田、箕浦、尾崎、犬養の同志五氏の共有として經營することゝなり、資金は、大隈氏の配慮によつて他から借入れたので、新經營と同時に紙幅を擴張し、論說を主として鋭く政府の攻擊に當つた。小西氏は、其後假名垣魯文氏と共に、今の都新聞の前身たる今日新聞を創刊した。

大隈氏を中心とする改進黨の組織されたのもこの時で、編輯局の賑かな事いふばかりなく、さながら梁山泊の觀を呈した。當時編輯室を仕切つて二室に分けてあつたのを、誰いふとなく上局、下局と名づけ、上局には稀に出社する鋤雲氏を初め、矢野、藤田、箕浦、犬養、尾崎

氏等の論説記者が机を並べ、下局には一般の編輯者、外交員等が陣取つてゐたので、在社中の原敬氏なども飜譯記者として下局仲間といふ有様であつたのである。

明治十六年…(七月二十日、前右大臣岩倉具視薨ず)…

政府の新聞壓迫方針強化さる。

反政府熱の氣勢大に揚がると同時に、新條例の適用は益々嚴しく、發行停止の壓迫が頻々として下るに及び、初めの中は世間でも、これを活氣ある新聞として、停止されるほど名聲を博したが、度重なるに隨ひ、三日から七日、十四日と停止期間が延長され、新聞としての用を爲さなくなると、自然讀者が離れ、度々停止を受けた本紙の如きは、非常な打擊を免れなかつた。

さらに政府は新聞退治として、これまで内務大臣にのみ與へられてゐた發行停止權、禁止權を地方長官にまで擴張し、印刷機を差押へる權能を與へるに至つた。

明治十七年…(七月七日、華族令を定む)…

矢野文雄氏歐洲に遊ぶ。

歐洲政情視察のため、矢野氏は洋行して留守となり、越えて十九年歸朝したが、その間に大阪で新聞を經營してゐた加藤政之助氏も來り加はり、文學方面では森田思軒氏も入社した。これと前後して犬養氏は去つて秋田に赴き、其後朝野新聞に入り、尾崎氏も招かれて其方へ行つた。

明治十八年…(十二月二十二日、内閣制度を定む)…

栗本鋤雲氏老を以て退社す、六十四歳。

明治七年入社以來、社内の尊敬を集めてゐた栗本氏も、老齢をもつて社を退くことゝなつた。

鋤雲氏は後明治三十年三月、七十六歳をもつて長逝し、小石川大塚善心寺に葬つた。數種の著書中、特にその隨筆を集めた『匏庵遺稿』は、幕末の有力資料として史家の間に重用されてゐる。

明治十九年…(一月二十六日、北海道廳設置)…

矢野文雄氏歸朝、紙面全般にわたる大改良を斷行す。三木善八氏入社。

三木善八氏

矢野氏は外遊二年、大に新知識を入れて歸朝した。矢野氏が歸朝後直ちに着手したのは、新聞を普遍的にする事で、それには記事をやさしく、代價も安くしなければならぬ、同時に三尺の大盆に瓦を積むより、一寸の小皿にダイヤモンドをといふので、これまで俗に『敷紙新聞』などと仇名された、ひろげれば疊一枚に近かつた紙幅を、約半分に切つめて、代價も一ケ月三十錢に引下げ、むづかしい漢字を制限して全體に振假名を多くし、社内に『三千字引』といふものを作つて、記者の文字濫用を戒めた。——三千字引の勵行は當時まだ困難であつたが、今日の漢字制限の先驅をなすものである。

三木善八氏が入社したのはこの年の九月十六日であつた。三木氏は淡路の出身で、以前郷里で新聞を經營してゐたが、後大阪に出で、藤田、加藤諸氏とともに大阪新報に從事してゐた。やがて、藤田氏にすゝめられて上京、當時小野梓氏が主となつて神田で經營してゐた集成社といふ書物屋に入つた。ある日、矢野氏と會見するや、意見忽ち一致し、矢野氏の懇請によつて入社、營業方面を受持つことゝなつた。三木氏と同郷の廣瀬永太郎氏も數年後入社し、專ら活版の方面に力を注ぐことゝなつた。

明治二十年…(四月十二日、伊藤首相の鹿鳴館假裝舞踏會)…

紙面全般の大改良に伴ひ、著しく目につくに至つた一の特長は、歐米、支那等に關する紀

記事中に英文を挿入。

行、通信、紹介記事の増加したことである。中にもハサミ込み風に英文など入れたところ、まことに清新の氣がみなぎつてゐる。一例をあぐれば左の如くである。

英國禮法心得

訪問の作法（續）

(七)男子が訪問に用ふる名刺は婦人の用ゆる者の半分の大きさとなす。

(7) The visiting cards of gentlemen are half the size of those used by ladies

——二月二十二日——

明治二十一年…（二月十七日、市町村制を公布）…

フランスから用紙輸入。政論本位から漸次報道主義に移る。大隈伯外務大臣となる。

三木善八氏は神戸以來紙に精通してをり、内地製の新聞用紙は、外國製に比して遙に高價でしかも供給が不足であつたので、フランスからとりよせた。これが第一回の外紙輸入である。

一方紙面の改良と同時に、編輯部内の組織も一變して、從來のいはゆる上局を廢し、記者全部編輯に當る事にして、論說は矢野氏自らこれを引受けた。藤田氏は當時同志の機關として、別に銀行事業に關係してゐたので、社の方は遊軍といふ形であつた。

新聞は政論本位から漸く報道主義に移り、いはゆる軟派、今日の社會部記事が重んぜられるやうになり、原抱一庵、村上浪六、村井弦齋や、田川大吉郎等の諸氏も前後して入社した。

大隈伯が再び入閣して外務大臣となるに及び、これを機會に政界隱退を志した矢野氏は、本社の方もするだけの事はして最早役目は果したから、手を引き度いとの事であつたが、二十三年までは遊軍として關係を續けたのである。

村井弦齋氏

村上浪六氏

明治二十二年…（二月十一日、憲法發布式擧行）…

夕刊（夕版と稱す）發行を試む。

矢野氏は三木氏と相談して、市内賣捌店の手を經ずに、直配達を實行し、さらに歐洲の新聞界にならつて、初刷から新たに夕刊（夕版と稱す）を發行して、朝夕二回配達したのは當時の最も新しい試みであつたが、配達機關不備のため、永續することが出來ず、止むなく一ケ年で中止したけれども、後本社が卒先して朝夕刊發行に成功したのは源を玆に發してゐる。なほ一月十一日の夕版に、矢野文雄氏自ら執筆して『宮城御移轉の御模樣』を謹記し、第一面全部を埋めて報道し、完全に他紙を壓した事は、後年まで同氏の得意話とするところであつた。

明治二十三年…（十一月二十五日、初帝國議會召集）…

年中無休刊を實行す。矢野文雄氏宮内省に入り社を退く。

夕刊中止と同時に、一月から年中無休刊として朝刊のみ發行した。

矢野氏はこの年社を退き宮内省に入り、小栗貞雄氏が廿六年まで社長代理のやうな形になつた。小栗氏は矢野氏の弟である。矢野氏は政論家であつたばかりでなく、二十年頃からその創案にかゝる『嘉坡通信—報知叢話』といふ風變りの小說を初めて揭載し、自身が輕快麗妙の筆で物した『浮城物語』を續載して、本紙における小說の濫觴をなし、やがて各新聞ともこれにならふやうになつた。また一方に通信社を創設して、新聞用達會社と名づけたが、これは政界隱退の時竹村良貞氏に讓り、帝國通信社となつたものである。

小栗貞雄氏

國會は開設され、本紙を急先鋒として、民論に味方する幾多

の新聞が、あらゆる政府の壓迫に抗して自由民權を叫び續けた效果はこゝに現れ、社同人中藤田氏は東京市から　箕浦氏は大分から、犬養氏は岡山から、尾崎氏は三重から、いづれも第一回の選擧に樂々と當選した。

明治二十四年…(四月一日、府縣制を實施)…

逆境時代來る。

十九年、紙面を刷新し、定價を引下げてから社運はめき〳〵と進んで行つたが、矢野氏の退社前後から、再び豪傑達が幅を利かし、政論本位の新聞に逆轉し、折角築き上げた讀者本位の型はめちや〳〵となり、經營難に陷づてしまつた。小栗、箕浦、森田思軒諸氏は殆ど無給といふ時期もあつた。

明治二十五年…(五月十二日、選擧干渉上奏案破る)…

逆境時代續く。

外には政府の壓迫による發行停止が頻々として至り、內には資力の窮乏から來る財政難に襲はれ、經營者の苦境は想像以上であつたが、これは本社ばかりではなく、政論を主とする大新聞の悉く陷つた窮地であつた。

新聞界はもとより、政治界の鬼才と呼ばれた藤田茂吉氏は、牛込佐土原町の自邸に病歿した。享年四十。遺著の中でも『文明東漸史』は、渡邊崑山や高野長英の事蹟を、廣く世に傳へた意味で、最も讀書子に知られてゐる。

明治二十六年…二月十日、製鐵會問題の大詔渙發)…

京橋區三十間堀三丁目に移轉。しば〳〵發行停止を受く。

四月一日、從來の藥研堀が不便な爲、政治と商業の中心に近い京橋區三十間堀三丁目十番地に移轉した。

この頃、阿部興人氏が社長で、村井弦齋氏が編輯主任であつた。阿部氏は改進黨の長老で方正溫厚の紳士であつた。當時社内の論客は大したもので、他社に比べてたしかに群を抜いてゐた。中にも尾崎行雄氏の『帝國臣民の天職』、箕浦勝人氏の『鐵道改良論』、中野武營氏の『取引所問題』、阿部興人氏の『國立銀行處分問題』、上遠野富之助氏の『海軍論』、大石熊吉氏の『議會改良論』、町田忠治氏の『東北獨立論』、犬養毅氏の『外交論』、加藤政之助氏の『國民教育論』などは殊に異彩を放ち、一方村井

阿部興人氏

弦齋氏は小說『獨眼龍』を連載し、他の軟派記者も大いに腕を揮つてゐた。

しかし、何しろ群雄割據の有樣で社内の統一を失ひ、眞向から伊藤内閣に突擊する有樣で、例の惡法によつて、七月から翌年の五月にわたり、三日、七日、十四日と停止は十回以上も重ねられ、深刻な打擊を蒙つた。

明治二十七年…(八月一日、對淸宣戰の詔勅渙發)…

三木善八氏社主となり經營を總轄し、改革の門出として題號に冠した『郵便』の二字を削つて、『報知新聞』と改む。

難局に處して、社長阿部興人氏、三木善八氏、など大いに奮鬪し、紙上には、圓城寺天山氏の『大隈伯昔日譚』、久米正武氏寄稿の『東史談』、野口寧齋氏の詩論、軟派の新進であつた遲塚麗水氏の漫筆など、かなり知識階級の人氣に投じたが、大勢を動かすことは出來ず、刻々財政難に陷つてきた。

日淸の風雲はいよ〳〵急をつげた。そこで財政難の中から、遲塚麗水、前川九萬人外二名の

遲塚麗水氏

熊田葦城氏

記者を特派し、通信の任に當らしめた。麗水氏の『韓山風雲錄』と題する通信は、六月十九日から紙上に連載されて異彩を放つた。特派員の通信は續々紙上に滿載され、七月二十五日の豐島沖海戰の勝報、次で牙山の大勝利等は、全文總二號で華々しく紙上を飾り、八月二日布告された『宣戰詔勅』は、當時の新聞としては頗る目立つた編輯法で掲げられた。

軍國的色彩は日に〳〵濃くなつたが、從前の論調がたゝつて、新聞の人氣は一向に引立たず、この好機會を目前に見ながら紙數は日々減るばかり、拋つておけば潰れる外はない。

この時敢然と起つたのが、箕浦勝人・三木善八兩氏であつた。

經營の方法さへよろしければ、やつて行けぬ事はない。これまでの首腦者は、政治の片手間仕事にやつてゐたが、新聞の經營は、專心これに當る人でなくてはならぬ。しかもその人はある。たゞ從來の關係者に餘計な口出しをされては困ると、これを條件として大隈伯から、以前の關係ある矢野文雄氏立會の上、

新たに經營一切をあげて三木善八氏に一任された。

三木氏が社主として經營を引受くると同時に、犬養氏、尾崎氏その他の硬派記者は、殆ど全部社を去り、阿部興人氏も關係を絶ち、箕浦氏を新たに社長に推し、村井弦齋氏を編輯總理に、熊田葦城氏を編輯長に、枝元長辰氏を外交主任とし、編輯方針を一新した。一方印刷には廣瀨永太郎氏を主任とし、活字もすべてルビ付に改正、小說は勿論、その他にも戰爭に關する挿繪をあまた入れて、所謂『高等綿入新聞』とし、これまでの堅くるしい型を全く打こはして、平明通俗的なものとした。そして、大改革の門出として、明治五年發行以來の名稱であつた『郵便報知新聞』の『郵便』をけづつて、現在の『報知新聞』に改めた。——十二月二十六日である。

當時背水の陣を布いて大活躍の舞臺に立つた本紙は、改題と同時に天下に向つて左の如き宣言をした。これやがて今日の主義、精神ともなつたのである。

宣言大要

一、郵便報知新聞を改題し、郵便の二字を削りて單に『報知新聞』となせり。

一、報知新聞は改題と共に其組織其記者と紙面とを一新せり。

一、報知新聞は全く政黨の機關たることを廢して獨立獨行の新聞となれり、故に政治經濟其

開新の日一節題

他百般の事に向つて公平無私の評論をなすべし。

一、報知新聞は高等なる繪入新聞となれり。從來の大新聞と稱するもの多くは主義偏僻にして文字佶屈、小新聞と稱するものは多く主義野卑にして文字猥褻、前者は俗人に解し易からず、後者は士君子の家庭に入るべからず、今日の社會は實に中庸を得たる新聞を缺く、今報知新聞は其の中庸を行き最も平易にして最も高尚に最も正大にして最も普通なる新聞となれり。

一、報知新聞は尊王尚武の主義を持す。今日以後我國が世界に雄飛せんと欲せば、帝室を尊び、軍隊を敬し、上下相和して尚武の主義を發揮するの道を講ぜざるべからず、報知新聞は實に世人と共に此道を講ぜんとす。

一、報知新聞は進取の主義を持す、今や征清局面は世人をして愈々此主義を發揮するの必要を認めたるを信ず、若し果して新聞紙が軍國の上に利益を與ふるを得るものとせば、報知新聞は殊に此主義を此事に盡すを期す。

明治二十八年…（三月三十日、日清講和條約調印）…

毎日六頁とし、紙面全く一新す。聲價大に上る。

日清戰爭は今やたけなはである。よろしくこれに向つて全力を注ぐべしと、從來の從軍記者の外に原田良信氏を陸軍方面に、弓削田精一氏を海軍方面に特派した。原田氏は元陸軍將校で、當時記者仲間の軍事通、また弓削田氏は海上萬里を往來した快男兒である。兩特派員の戰報は非常に好評を博した。

村井弦齋氏は一月初刊の紙上から『旭日櫻』と題する軍事小說を連載した。鈴木華邨氏の挿繪と相まつて讀者から大に喜ばれた。

當時熊田氏の編輯ぶりは他社に比して實にあざやかなもので、編輯長自から記事を平易に簡潔に書きなほし、記事の重要部分に二號活字を入れることをも工夫し、時には論文も書いた。上島長久、村上政亮、岡鬼太郎、篠田鑛造等の諸氏も新進の氣を負うて大に働いた。

本紙を六頁とする事は、明治二十五年十月頃から隔日位に行はれ、二十七年に至つては、月の中二十日以上も六頁であつたが、この時から確實に毎日六頁として發行し、外に朝野有名な人士の肖像と支那各地の風景を寫眞版にして附錄とし、一月から毎日一枚づゝ本紙に添へて讀者に配つた。第一に有栖川宮樣、次に小松宮樣、閑院宮樣、續いて大山、山縣、西鄕、樺山、野津、佐久間、山路といふ順序に、陸海軍の巨頭を毎日紹介したので、これが非常に人氣を呼んだ。これは活版部主任廣瀨氏の工夫であつた。

弦齋氏は『旭日櫻』が終ると歷史小說『小弓御所』を書き、松居松葉氏は同じく『惡源太』を連載し、これがまた大にうけた。一方、商況や物價等にも重きをおき、日々の相場を大切に取扱つた。この頃から重大記事の標題に初號活字を使用しはじめ、威海衞の陷落とか、丁汝昌の降服とか初號で大に賑はつた。

それよりも讀者、とりわけ婦人や子供にうけたのは、ルビ付活字の使用であつた。これまで新聞といふものは難かしいものと思つてゐた婦人や子供が、振假名つきの、しかも平易な文章に接したので、大喜びでこれを讀むやうになつた。

本紙は普遍的、讀者本位を目じるしとして、出來る限の力を盡した。その效果は著々として

現れ、新聞の聲價は日に月に回復され、餘りくだけた編輯方針にかれこれと非難を加へた同業者も、意外の好評に驚いて、先に小說を載せはじめた當時のごとく、だん〳〵眞似をするやうになつた。

一時全く危機に瀕して、風前の燈火かのやうな窮地に陷つてゐた本紙も、三木氏を初め社を擧げての努力により、わづか一年の間に形勢を盛返して、發行部數も數萬に達し、經濟狀態も次第に順調に向ひ、大發展の曙光を見るに至つたのである。

明治二十九年…（九月十八日　紙幅內閣成る）…

フランスからマリノニ式輪轉機を購入、發行能率を進む。

社長箕浦氏と社主三木氏の指導經營よろしきを得たるため、日淸戰後は引續き順調をたどり、發行部數は戰時の四、五萬を維持した。しかも益々積極的に進まねばならぬ必要上、フランスからマリノニ式輪轉機を購入したが、これが東京はもちろん全國新聞において輪轉機を据ゑつけた最初であつた。

廣瀨永太郎氏

こゝに重要なる役割を務めたのは廣瀨永太郎氏である。廣瀨氏は非常に研究心に富み、活版のことに豐富な趣味をもつてゐた。本社の分身であつた報文社の經營を託され、本紙の印刷に種々の改良を加へ、一方營業や廣告にも携り、四方八方切り廻したが、それが着々成功し、殊に廣告の意匠とか、紙面の體裁とか、寫眞版の研究とかに頗る綿密な注意をはらつた。三木氏もまた廣瀨氏を片腕と頼み、すべて社の經營に關することを相談して改善の方針を樹てた。

これまでの平版刷りが、輪轉機印刷に變つた結果、新聞の體裁が面目を一新したと同時に、發行能率大いに進み、社の經營はだん〳〵樂になつた。この頃、編輯には田川大吉郎氏が入つて、硬派編輯の任にあたり、營業部には賴母木桂吉氏が入り、鋭意販賣の擴張や廣告の改善に從事した。

明治三十年…（十二月十八日、露國旅順口を占領）…

新聞紙法の改正案兩院を通過す。婦人記者の採用。

明治八年以來、新聞及び新聞記者を脅威し、一般新聞紙の發達を阻害した新聞條例の改正案は、明治二十三年議會開會の頭初から、本社の箕浦氏によつて毎回議會に提出され、衆議院は屢々通過したが、其都度貴族院の阻止に會ひ目的を達し得なかつた。松隈内閣のこの年、第十議會で始めて兩院を通過し、初期以來の宿題を解決して、行政處分による新聞紙の發行禁止及び停止を廢することゝなり、三月から實施された。

日清戰爭中から快腕を揮つた熊田葦城氏は、この前後にかけて、社會面（三面）の記事、體裁、探訪方法等に大改良を加へ、編輯局内に『探偵部』なるものを設け、元刑事を勤めてゐた老練な探訪二三名を入れて、盛にこれを活動させ、警視廳や警察の鼻をあかすことも度々あつた。今日の社會部の元祖をなすものである。

この年入社した羽仁もと子が、恐らく各社婦人記者としての最初であらう。羽仁女史は『不幸女』の訪問記事を書き、『不幸女會』を催しなどして大いに活躍した。

アメリカから外紙輸入を試みたのもこの年である。

明治三十一年…（六月三十日、板隈内閣組織）…

家庭向の新聞。『職業案内』欄を設く。

五川大吉郎氏

事件の報道を機敏ならしめると同時に、家庭向の高等雜報に重きをおき、篠田氏は特に村井氏の命により上流種と江戸ッ子種の專任の如くなり、『新聞と家庭』とを親密ならしめるために、あらゆる努力を費した。『いかなる家庭にも安心して讀まれる新聞』、『讀んですぐ益になる新聞』を作ることにます〳〵力を傾けた。從つて、『報知は家庭向の新聞である』といふ觀念が、世人の頭に刻み込まれた。

六月、田川氏の發案で『職業案内』欄を始めて設けたのが、また當時の呼物となり、これも多數の模倣者を出して、各紙案内欄の元祖といふことになつた。

明治三十二年…(七月十七日、外國人に内地雜居を許す)…

『固定した讀者』『增加し、『販賣』に重きをおく。

日清戰爭から、戰後にかけて增加して發行部數は、いはゞ根柢の薄弱な增加で、やゝともすれば讀者が動搖せんとしたが、本社が各種の新計畫をたてゝ『家庭と新聞』を結びつけた結果は、遂に根柢の固き增加となり、『固定した讀者』となるに至り、東京各新聞社中、發行部數常に第一たる地盤を確立することが出來たのである。

かくして『販賣』はいよ〳〵重視さるゝに至り、十一月には、淡路の人大藏彌太郎氏がこの方面を主宰するために入社した。

明治三十三年…(五月、清國義和團匪の暴動起る)…

安信所と代理部を設く。

篠田鐵造氏

教育の普及發達につれ、交通機關の完備に伴ひ、新聞の賣れ口に非常な好影響をもたらして來た。一種の贅澤品視されてゐた新聞は、今や平生缺くことの出來ぬ『日用品』たる傾向を生ずるに至つた。

この氣運に乘じて、一月には、從來あつた探偵部を擴張し、始めて安信所を設け、篠田氏がこれを主宰し、五月には買物部を設けたが、これが各社代理部の始まりである。

この頃紙上には『實業工業便り』、『英文投書』、『衞生顧問』等の諸欄を設けて、大いに讀者に歡迎された。

明治三十四年……（九月七日、北清拳變講和議定書調印）……

『法律顧問』を設く。『雇人奬勵會』を催す。

一月には、紙上に『法律顧問』を設け、二月には『雇人奬勵會』を催した。これ等は悉く『新聞と家庭』とを密接ならしめるためと、社會奉仕とを目的とし、特に『雇人奬勵會』は、町家に使はるゝ人々の向上發展をはかるために、本社は多くの犧牲を拂つた。その人氣は素晴らしく、二月十一日の第一回は、一萬五千個の辨當を上野の會場へ持ち込んだのに、なほかつ不足をつげる有樣であつた。大隈伯はこの事業に對して非常に贊成し、わざ〳〵會場に臨んで、店員のために有益な訓話をなした。この奬勵會は引續き毎年一回催された。

村井氏の新篇百道樂の第一『釣道樂』は、五月十一日から掲載され始めた。

明治三十五年……一月三十日、日英同盟條約締結）……

最新式色刷輪轉機により、三色刷を發行す。

前年十二月、最新式色刷輪轉機を輸入し、一月三日から毎日三色刷の新聞紙を發行した。これは新味を好む讀者を少なからず喜ばし、廣瀨氏や賴母木氏の計畫で廣告にもこれを利用して非常に利き目があり、廣告主を滿足せしめた。

この新しい試みは、他の繪附錄の競爭者を驚かし、一二模倣者をも生じたが、これは發行能力に限りがあるため、部數の增加と共に漸次使用しないことゝなつた。

明治三十六年…七月十二日、露國極東總督府を開設…

販賣機關刷新のため、各地に支局分局を設く。

『靜岡縣附錄』を發行。

當時の營業部長大歳彌太郎氏の精彩ある政策は、着々として實行された。卽ち販賣機關を刷新するため、各地に支局、分局を設け、從來の新聞販賣店以外、本社直轄の配達制度を定めると、販賣店の方でもこれに對抗する爲、同一新聞を以て競爭するの奇觀を呈し、支分局扱ひの增加率と、販賣店扱ひの增加率とが常に同一比例を以て、發行部數を激增せしめた。

大歳彌太郎氏

始めて『靜岡縣附錄』を發行して、現在各社に行はるゝ地方版の先驅をなしたのもこの年であり、四月二十九日、賴母木案として行つた『工場公開』も、新しい試みであつた。六月七日には、所謂七博士の『露國討つべし』との建白あり、各新聞の對露論調は益々强硬となり、日露の風雲は愈々急をつげるに至つた。

明治三十七年…(二月十日、對露宣戰の詔勅渙發)…

寫眞版に成功す。軍國新聞編輯の陣容成る。

社運の大躍進。

新聞紙に寫眞製版を刷込むことについては、各社ともそれ〴〵苦心したが、一として成功を見なかつた。本社では、活版界の鬼才と呼ばれた廣瀨永太郎氏がいろ〳〵工夫を凝らしてみたが思はしからず、日淸戰爭當時は寫眞版を別に刷つて、附錄とする外に方法はなかつた。廣瀨氏は、如何にもして、これを新聞に同時に刷込む方法を案出したいと、日淸戰後も引續き研究を重ねてゐたが、熱心の效空しからず、ふとしたことが動機となつて、前年の十二月、見事にこれを案出し、年內に五六回內密に試驗した上、いよ〳〵この年の初刷から實行した。

初刷の第一面、しかも全頁に色刷の輪廓をほどこして、配合の巧妙、鮮明な印刷とで現れた寫眞を見て、世間も他の新聞もあつと驚いた。掲げた寫眞は、高倉典侍、柳原愛子の方、女官園祥子をはじめ、高橋義雄氏夫人千代子と、女優川上貞奴とであつた。

この寫眞掲載は、當時の新聞としては破天荒な新機軸で、各社はこの新工夫を手に入れんものと大いに苦心したが、數ケ月は本社の獨占であつた。

時も時、日露の國交は切迫した。日清戰爭の時の失敗を繰返してはならぬと、早く準備に着手して、先づ編輯部の戰時組織にかゝり、日清役の當時非凡の手腕をあらはした熊田葦城氏を廣島から迎へて編輯長とし、小田原閑居の村井弦齋氏を起して編輯を總理せしめた。

當時編輯局内には、上島長久、村上政亮、篠田鑛造、福島太明、谷新太郎、森泰介、和井内喜德、中村千代松等の諸氏をはじめ、新進氣鋭の記者を擁してゐたが、朝鮮、支那の各地、關西の軍事に關係ある地方、その他歐洲の主要地に、にはかに通信機關を設けた。

かくて、二月九日、仁川港外の第一戰大快報の號外戰に勝つたのを手はじめに、常に他社よりも報道が速く、一方、淺田江村、和井内不來外數名の從軍記者の特信は、軍國新聞として遺憾なき精彩を發揮した。

閉塞隊の快擧、東洋艦隊の全滅、沙河の會戰、旅順の開城、奉天の勝報、日本海の大勝——すべて『號外戰』は本社の勝利に歸した。公報に先じて、當局を面くらはしたことも度々あつた。『報知の號外は速いもの』と相場がきまつて、讀者も、同業者も、號外賣子も、當り前のやうに考へてゐた。

號外賣は、常に本社の前に殺到し、販賣から受取るのに先を爭つて社内にまでなだれ込み、ドアを押し破る、販賣部員に喰つてかゝるといふ有樣なので、遂に重要號外發行の時には、警官護衛の下に發行したことも十數回あつた程である。

一方初刷から始めた寫眞版は、毎號の紙上を飾つて、本紙獨特の異彩を放ち、まつ先に關東總督アレキシーフや、東洋艦隊司令長官スタルクの肖像を掲げ、我國陸海軍の巨頭を連載して、大に紙面を賑はし、戰死將校や殊勳軍人や、西村蟹谷氏の筆になつた戰時畫報の寫眞版など、讀者の血を沸かした。

戰況報道の機敏を期すると同時に、家庭、娯樂、趣味の方面にも力をそゝぎ、中村千代松氏擔任の家庭記事、とりわけ『家庭問答』のごときは、軍國新聞の一部を飾つて、讀者の好評を博し、『徵兵問答』も、青年のために好個の羅針盤であつた。講談師桃川實氏の『觀戰珍談』も大にうけた。

當時、社員の士氣の旺盛は非常なもので、戰時の新聞を作るには、先づ社內から戰爭氣分にならねばならぬといふので、編輯は勿論、事務も、工場も、給仕も、小使に至るまで、歩き方から違ふといふ有樣、――この氣分は紙面に反映し、效果は着々現れ、讀者は日々に激增して、開戰當時八九萬であつたのが、年の暮には二十萬に達した。前年設けた直營の販賣制度はますゝその光を發揮したのである。

明治三十八年…（十月十六日、平和克復の詔勅下る）…

一萬號に達す。麴町區有樂町に移轉。

社運日に月に益々隆昌。

二月十六日、一萬號の記念に際しては、賣捌人に第一回の奬勵金を贈つて、販賣政策の新工夫を試み、また軍國の殺伐なる氣分を和らげるために、當時讀者をうならした弦齋氏の『食道樂』を芝居にしく、梅幸、高麗藏、訥升等によつて、これが歌舞伎座に上演された。

社運日に隆昌に向ふと共に、忽ち從來の社屋では狹隘を感ずるに至つたので、戰時多端の折柄ながら、新たに丸ノ內に地を相して、三十七年五月から工事に滿一ヶ年を費して新建築を落成し、この年五月四日を以て移轉したのが今殘つてゐる舊館の建物で、敷地は麴町區有樂町二丁目一番地である。當時附近はまだ一帶の原野で、日比谷まで見通し、しかもその一角を領した新社屋は、當時の新聞社としては、他に比類のない大建築であつたので、その昔藥研堀の本社が帝都の一異彩として錦繪になつた以上に異彩を放つた。

新社屋は、其の頃としては、内容きはめて理想的の設計で、社内各種機關の聯絡を巧みにし、殊に工場に於けるエレベーターの裝置、社内全部に點ずる電燈の設備、印刷工場の機關室に、電氣發動機の外、ガスエンヂン二臺(五十馬力)を据付けた如き、印刷工場及び機關室に於て、特にシヤフトを地中に取り入れた如き、最も注目すべきものであつた。殊にシヤフト取り入れ方は、これまで他に類例をみぬ一種の新案であつて、この機關の設計は、すべて鮎川義介工學士によつて爲されたものである、同氏は現在の日本産業の社長である。

さらにこれを機會として、新に最新色刷輪轉機一臺を据付けた。これで從來のを合はせて、色刷二臺、普通二臺、すべて〻輪轉機が四臺となつた。當時、四臺の輪轉機を有するのは本社一社であつた。――これで發行能率も十分となり、間もなく、日本海の大海戰はある、地の利はよし、社はます〳〵飛躍した。

社屋の一新と共に、紙面の體裁も大いに改善され、新聞としての本領をます〳〵發揮した。しかも日露の戰局はいよ〳〵終末に近づいて來たので、第二段の講和會議に善處すべく、ロンドン、ベルリン、パリ、ワシントン、ニューヨーク、サンフランシスコ等に通信網を張ると共に、七月、石川安次郎(半山)氏を特派員として談判地ポーツマスに送つた。

この秋、講和條約の成立から、國論が沸騰して、九月五日の國民大會となると、本社は最も會場に近い形勝の地にあつた關係から、逸早く號外を發行して騒擾の實況を報道したのが非常な勢力となつて、その號外の賣行は全く物凄い程であつた。この時他社では用紙の欠乏に苦しんだが、本社は特にスエーデン、ノルウエーから數千噸の輸入用紙が着いて、その一部が蓄積されてあつたので、本社だけが餘力を有し、刷つても〳〵足らぬ無限の賣行に對して、遂に翌日の午後四時頃まで休みなしに刷續けたといふ未曾有の壯觀を呈したのである。これが東京各新聞紙中、發行部數第一位といふ地歩を確立した基となつた。

要するに、日露戰爭は、わが軍が連戰連勝をもつて始終したと同樣、本社も最初から最終に至るまで、絶對優勢の地位に立つた。『日露戰爭と報知新聞』――これこそ本社が今日の隆盛をなしてゐる礎石であつて、大報知の發展史上、特筆大書すべき一節である。この時から發行部數は遂に三十四萬を突破した。そこで、世の中の動搖の鎭まるをまつて、社側の空地において祝宴會を開き、箕浦社長や、三木社主の激勵と、社員に對する慰勞があつた。

明治三十九年…（四月三十日、凱旋大觀兵式擧行）…

『巡航博覽會』を催す　夕刊再興の成功

日露戰爭と講和問題とで大いにその聲價を高め、遂に發行部數三十四萬を突破した本紙は、戰後もあくまでその狀態を維持すべく、社中一同大車輪となつて奮闘した。編輯方面は事件を中心とする社會記事と、從來の特色とする家庭記事に最も力を注ぎ、營業方面は直營制度をます〳〵擴張して、東京市内は勿論、地方における勢力を固めた。また『長壽法』、『豆腐料理』、『野菜料理』等を懸賞募集し、代理部（買物部を改稱）で出版した。

この年、當局に交渉して、ロシアの捕獲船ロセッタ丸を借受け、本社主催の下に『巡航博覽會』を計畫し、船内數十ヶ所に、東京、大阪大商店の陳列品を美々しく飾り立て、餘興萬端の設備を整へ、熊田編輯長以下十數名の社員これに乘込み、四月十六日横濱を振出しに、關西、九州各地の主要港を巡航した。この奇拔な博覽會は到るところ大評判で、觀覽者ひきもきらぬ

有樣であつた。

巡航博覽會がまだ終らぬ時、第二回目の『夕刊』發行が計畫された。前述の如く、第一回夕刊發行は、明治二十二年、矢野文雄時代に實行されたけれ共、當時は讀者に切實な要求がなかつたのと、社内の事情とによつて成功をみず中止されたのであるが、今や日露戰爭には勝つ、世の事物も急速に進歩する、讀者もまた昔日の讀者でない、好機逸すべからずといふ調子で、わづか一晝夜の間に計畫が熟した。

顧母木桂吉氏

この夕刊計畫には、當時米國の新聞界を視察して歸つた賴母木桂吉氏が主として携り、十月二十七日からいよ〳〵四頁の夕刊を發行し、東京、横濱兩市内の讀者に配達した。『その日の出來事を知るに、翌日の新聞をまつほど悠長ではない』兩市の讀者は、本社の夕刊發行を非常に歡迎した。最も急速を尊ぶ相場記事の如き、特に歡迎された。

夕刊は午後四時までの出來事をこと〴〵く網羅し、特に經濟記事と政治記事に重きをおいた。朝刊は社會記事に力をそゝいだ。故に本紙の讀者は、丁度二種類の新聞を購讀すると同じく、その日の夕刊で各方面の大勢を知り、翌朝の新聞で、さらに詳しき報道に接した。――東京市

再興第一　日の夕刊と社告

内の讀者は大いにこれを重寶として、發行部數は彌が上に增加した。

夕刊はまた『一枚賣り』に成功した。『夕刊は一錢、報知の夕刊は一錢』と、一種特別の勇ましい賣子の呼聲は、電車の停留所や停車場、さては辻々の一名物となつた。最初本社の夕刊發行をみて、格別問題にしなかつた他の同業者も、意外な成功に驚ろいて、間もなく眞似るに至つた。――夕刊發行當時から四五年間は、京濱の讀者に限られて配達されたが、明治四十四年から一般の讀者に配達することにした

明治四十年…（七月二十四日、日韓新協約調印）…

我國未曾有の長文電報を掲載す、教育活動寫眞の公開。

二月十七日、日本で未だかつてない長文の外國電報が、本社の編輯局に到着した。それは米國の通信員に旨を含めて取らした、クロパトキン將軍の著した『日露戰史』の大要で、ニューヨークヘラルドから發電し、サンフランシスコのコール社を經由して、この日に着たもので

日本最初の長外電—「日露戰史」

ある、數千語に達する長文の外電、當時としては、實に破天荒なことであつた。

待ち構へてゐた外報部では、殆ど徹夜で飜譯に從事し、十八日の朝刊は、二面三面ぶつ通しで、この未曾有の長い外電はデカ〳〵と掲げられた。何しろ世界の耳目をそばだゝしめたクロパトキンの『日露戰史』である。日本の勝てるわけ、露國敗れたわけを、詳細に說いた當年の敵總帥の告白である。戰勝國民として、これ以上の讀物はない。皆かじりつくやうにしてこれを讀んだ。讀んで長文の外電に驚いた。

日露役出征の野津、乃木、奧等の諸將軍をはじめ、參謀連の戰記に對する批評を求めた。

いづれも批評の口を開く前に、『報知は通信界のレコードを破つた』と先づ驚いた。米國の大使館は原文を借りに來て、今回の長文電報は、日本の新聞史上に於ける空前の快擧であると讃辭を述べた。

この電報を取扱つた江戸橋電信局の外電係は、『私も電報發着の最も繁忙を極めた日露戰爭の時から當局に勤務してゐますが、こんな長い電報を取扱つたことはありません、隨分思ひ切つたことをしましたネ、私達でもこの長電には大いにうろたへて、三人で四時間かゝつて電信用紙に書きとつた次第です』と、眼を見張つた。この長文電報の掲載は村上政亮氏と賴母木桂吉氏との大英斷であつた。

七月、『素人角力大會』を九段に催し、登場力士三百五十人、取組百五十番、盛會であつた。

日比谷公園に於て『教育活動寫眞』を公開し、ついで地方巡回をなし、この種催しの先鞭をつけたのもこの年である。

明治四十一年…(十月十三日、戊申詔書下る)…

東京毎日新聞を兼營、水泳大會を催す。

東京毎日新聞は、横濱毎日新聞の後身で、島田三郎氏が半生の心血をそゝいだ最も歴史ある新聞である。ところが、いつの間にか經營難に陥つたので、大隈伯の仲介で讓渡方を本社に申込んで來た。契約が成立し、三木氏の手でこれを經營するやうになつたのは、年の末であつた。

まづ第一歩として、銀座四丁目の角から丸ノ内の本社隣地、報文社に移轉し、社長には武富時敏、副社長に田中穂積、主筆に小山東助、編輯局長に關和知の諸氏を据ゑて、氣品ある新聞を作つた。

この年主催した千住大橋から月島までの水泳大會には、八十餘名參加し、十人の女子の應募者中三人が參加し、一人は入賞するなど盛況を呈した。

明治四十二年…(九月二十六日、伊藤公ハルビンにて遭難)…

都下の大洪水に救恤。煙火大會を催す。

六月に、前年の東京毎日新聞の編輯幹部は、事情のため一同社を退き、その後は武富社長の下に本社から三浦勝太郎氏が轉じて主筆兼編輯局長となり、社會部は中山太郎氏主宰して、六頁となし、島田時代の東毎の主義を尊重して嚴正に公平に、かつ本紙と同じ經營であるため全然編輯方法の違つた新聞を作つたのである。

七月、本社は都下の大洪水に際し、讀者と共に數萬金を醵出して被害者の救恤に盡した。

この年、大森に於て行はれた『煙火大會』は、本社の率先して計畫した催しで、未曾有の大盛會であつたが、始めての事とて、大きな危險物である花火が社に送込まれ、取扱ひに大困りしたといふ喜劇もあつた。

明治四十三年…（八月二十二日、韓國併合）…

一萬二千號記念に『明治商工史』編纂。

一月には米國政府の滿洲鐵道共同管理に關する提議に對し不同意回答、四月には第六潛水艦廣島灣頭に沈沒、五月には幸德秋水の大逆事件發覺、九月には朝鮮總督府官制公布など、重大事件相つぐ中に、社運は極めて順調であつた。この年の紙面には一頁の記事廣告が散見され、一月十四日の夕刊第三面はクラブ洗粉の廣告で、四月八日の朝刊第四面は、やまと新聞社主催、櫻田十八烈士五十年祭の廣告で、全面が埋められてゐる。

韓國併合の時は、本社主催の盛大なる提灯行列を催した。

八月には一萬二千號の記念として、澁澤男指導の下に、『明治商工史』が編纂された。

明治四十四年…（三月二十三日、米國加州の排日法案可決）…

羽田海水浴場公開。聯合野球大會を催す。

七月九日、羽田扇ヶ浦で海水浴場の開場式を行ひ、大隈重信伯、澁澤榮一男、下田歌子女史といふ當代第一等の顔觸れが揃つた。十六日の藪入には入場者一萬を超え、羽田始つて以來の壯觀を呈し、これから毎年行はれた。

七月十九日、羽田運動場で行つた聯合野球大會には、青山學院、早稻田中學、荏原中學、成城中學、立教中學、横濱中學、正則中學の七校が參加し、審判官は押川清、飛田忠順兩氏であつた。

八月には羽田に模型飛行機競技大會を催した。親切第一を主旨として、安信所に『看護婦部』を設けたのもこの年である。

明治四十五年——大正元年

御大葬には救護班を出し、終日終夜麥湯の接待をなす。

七月二十日、明治天皇御不例の旨發表せらるゝや、社員は市民と共に交代にて宮城前に詣いて御平癒を祈り、晝夜を分たず社内に詰めきり、沈痛嚴肅の氣が漲つてゐた。七月三十日午前零時四十三分崩御し給ひ、擧國萬民哀痛、天日爲に闇きを覺えた。

大正元年九月十三日の御大葬には、救護班を出し、終日終夜麥湯の接待をなした。また手桶百個を造つてこれを御通の町筋に配り、清水を入れて出してもらつた。

全國菊花大會を、この秋淺草國技館で催した。

大正二年…（九月、支那第二革命失敗）…

箕浦勝人氏社長を辭す。東京毎日新聞を讓渡。

一月桂公は新政黨組織の聲明をなし、明治廿七年以來社長の椅子にあつて、三木社主と共に社運の隆盛を導いた箕浦勝人氏は、その樞機に參與するため、一身の故をもつて社を煩はす譯にはゆかぬと、自ら進んで社長の職を辭し、社長は當分、三木社主によつて兼務された。

三月一日から『報知醫局』を公開した。また『東西合併角力大懸賞』を催し、東京方の横綱を倒した大阪力士には金杯一個、大關（西ノ海、鳳、駒ケ嶽）を倒した大阪力士には銀杯一個、東西幕内全部を通じ最優力士に銘刀一口を呈することゝして、人氣を呼んだ。

明治四十二年から本社の兼營に移つた東京毎日新聞は、一時は發行部數も相當に出て、全國にわたつて好評を得たが、この年山本實彦氏の希望によつてこれを讓渡した。

こゝに大正初年頃の本社の陣容を一瞥すると、編輯には村上政亮氏の下に、論説は主筆上島

村上政亮氏

上島長久氏

須崎默堂氏

長久氏が夕刊に『十把一束』の名文を掲げ、須崎默堂氏は朝刊に健筆を揮ひ、石川半山氏、佐藤天風氏あり、硬派主任は高田知一郎氏、これを片切勝彦氏が輔佐し、軟派主任は松原至文氏、遊軍に福島太明氏、經濟には谷撝山氏、森泰介氏、商況には北川幾之助氏、地方版に生駒粂藏氏、その他元老格の熊田葦城氏の外、堀紫山、野上臼川、平井晩村、岡本四郎、田中萬逸の諸氏あり、三木氏の相談役格の廣瀬永太郎氏、販賣の大歳彌太郎氏、廣告の細谷丈夫氏、會計の川島錐三郎氏などがあつた。

大正三年…（八月二十三日、對独宣戰の詔勅渙發）…

『德川榮華物語』絶讃を博す。

松林伯知氏の『德川榮華物語』は、明治三十八年十一月十三日から連載、四十五年三月十日からは、その内の『水戸黄門記』となり熱狂せしめ、この年十一月二十四日まで續き、實に前後十年にわたり、新聞讀物としての新記錄を作つた。松林氏は當時のインテリ講釋師で、創作講談、新講談のさきがけをなした人である。讀者の人氣に乘じ、『水戸黄門』の助さん格さんをもじつた『晴山』

川島錐三郎氏

といふ講釋師、『茂吉』といふスリになぞらへて、政治面の野村長一氏が『茂吉』となり、社會面の長井修吉氏が『晴山』となつて、七月十三日から各地方を廻り、『晴山茂吉善根旅行』なるものを兩面紙上に連載して更に人氣を呼んだ。

前年二月、桂内閣の後をうけて山本内閣成立したが、この年一月、所謂シーメンス事件起り、三月山本内閣辭職、もみにもんだ結果、四月十三日、大命大隈伯に降下した。六月サラエヴオの變あり、歐洲大戰の導火となる。本社特別通信員松村介石氏は、八月十五日東京を出發歐洲に向つた。

今夏、「私立天文臺」を富士山上に置き、月體の觀測をして讀者に報道した。

秋の青島攻圍戰には、特派員の通信に、號外戰に、大に奮鬪した。

大正四年…（十一月十日、御即位の御大禮）…

大隈改造内閣に、箕浦氏遞信大臣として入閣す。

二月には春季俳句大會を催し、ついで刀劍鑑定會を催した。五月には赤十字社總會の出席者を招待して、午前十時から午後四時まで社を公開し、工場を觀せ、九月には老人婦人子供を主とする桃山御陵參拜團を組織して感謝された。

增師問題解決の餘波から、所謂大浦事件なるもの起り、七月、大隈内閣一旦辭職し、八月改造内閣成り、前社長箕浦勝人氏入つて遞信大臣となつた。

歐洲には大戰いつ果つべしとも覺えず、東亞には緊迫せる日支の重大交渉あり、内外大事件相つぎ、紙面大に活氣を呈した。

大正五年…（八月二十七日、伊太利の對獨宣戰）…

完全に東洋一を維持す。

歐洲大戰はますゝ擴大するばかり、我國も聯合國側として參戰はしてをるが、何等實質的の痛痒なく、所謂好景氣の波に洗はれてゐる。紙面も、此『好景氣』を反映し、經濟記事、景氣記事は各面に進出して賑ひ、完全に東洋一を維持した。

大正六年…（四月六日、米國の對獨宣戰）…

添田壽一氏社長に就任。『京濱マラソン競走』を催す。

法學博士添田壽一氏は、大隈内閣の鐵道院總裁を辭して間もなく本社社長の椅子に着いた。

添田壽一氏

常に身を以て率ゐ、論説を社長が自ら書いたのは、藤田氏、矢野氏以來のこと、溫健中正、語辭丁寧慇懃を極めた名文であつた。

奠都五十年記念として、『京濟間マラソン競走』の催されたのは十月二十一日である。名譽會長は東京高師嘉納治五郎校長で、大宮上野間約十八哩の豫選に勝つた三十選手が參加し、横濱公園から上野寛永寺まで二十五哩を走破したものである。一着は千葉白潟青年會の鵜澤文雄氏、後年オリムピックに出場した名選手高師の金栗四三氏は時の審判員、早大の三浦彌平氏は選手として八着であつた。

大正七年…(十一月十一日、大戰休戰條約調印)…

白米の廉賣を行ふ。一萬五千號記念に『最近商工史』を編纂す。

明治四十二年七月、都下の大洪水に際し、讀者と共に救恤に盡したことは前述の如くであるが、以來風水害ある毎に、都下と地方とを問はず、隨時救護隊を派出して、奉仕の實を擧ぐる事に務めて來た。たま〳〵この年米價頻りに暴騰し、遂に米騒動まで勃發したので、社會奉仕の意味において、白米の廉賣を行つた。

十一月には一萬五千號に達し、その記念として、澁澤男を顧問、添田社長監修、當時經濟記事を主宰してゐた谷攝山氏編纂として、一萬二千號當時の『明治商工史』に增補改訂を加へ、『最近商工史』を刊行した。

大正八年…(十月二十九日、第一回國際勞働會議)…

町田忠治氏社長に就任。

五月添田社長は辭して箕浦氏と同樣相談役となり、町田忠治氏が後をついで社長となつた。町田氏は先に阿部興人氏時代論説記者として在社した事があり、その頃の新聞論説は新聞と新

町田忠治氏

聞との討論時代であつたが、町田氏の筆法は元氣横溢颯爽たることとにおいて有名であつた。從つて社長となつてからも、論說には非常に重きをおき、自身筆を執つて書くばかりでなく、記者の書いたものにも愼重に目を通し、意に充たなければ掲載させないといふ風であつた。十一月には、これまでの調査部を擴張して、新聞編輯に活用することゝなつた。

大正九年…(三月十三日、尼港事件)…

大學專門學校驛傳競走創始　職制を定む。

朝刊を六頁とし、家庭欄及經濟欄を獨立。

一月、從來の慣行を斟酌して職制を定め、總務、編輯、營業、工務の四局に分ち、局にはそれぞ〳〵部を屬せしめ、いよ〳〵强固な陣容は成立つた。

六月十六日から、從來の朝刊四頁を六頁に改め、家庭欄及び經濟欄を獨立せしめ、ついで學藝欄をも設け、紙面の內容、體裁を一新した。

この年創始された、東京箱根往復百五十哩の大學專門學校對抗驛傳競走が、日本陸上競技界の長距離における、多くの第一流選手を出してをることは、周知のことである。東京横濱間中等學校驛傳競走、小學校陸上競技大會も始められた。

大正十年…(十一月四日、原首相遭難)…

大規模の外紙輸入計畫を樹つ。

文化の基調たると同時に、衣食住の外に缺くべからざる『日用品』として、各家庭に供給せられる新聞紙は、出來るだけ安價に提供せなければならぬ。安價に提供するには、生產費を出來るだけ安くしなければならぬ。生產費を安くするには、新聞の生產費中その主位にある用紙を、なるべく安價に手に入れねばならぬ。――本社は前記の如く、すでに三回外紙輸入を試みたが、歐洲大戰後發行部數の激增に伴ひ、內地用紙の供給不足に惱まされた結果、こゝに大規

模の輸入計畫を樹て、前年八月、スエーデンに向つて數千噸直輸入の汽文を發し、一方フインランド、ドイツ、アメリカ等にもそれ〴〵連絡をとつて供給をあふいだ。十年、十二年にわたる本紙の輸入用紙は莫大な數量に達し、高價の傾向をたどつてゐた内地紙が、相當の値下げをなしたほどであつた。

大正十一年…(二月二十日、普選促進全國記者大會)…

創刊五十周年並に新館落成の祝賀會を擧行
各宮殿下御揃ひ台臨の光榮に浴す

一月十日、大隈重信侯薨去、享年八十五。十七日、日比谷に於ける國民葬は、實に未曾有の盛大さであつた。

社運の隆盛に赴くまゝに、明治三十八年五月には、丸ノ内に進出し、現在の舊館を新築移轉したが、年々の著しき發展に伴ひ手狹となり、特に歐洲大戰の結果は、新聞事業の非常なる擴張を必要とするに至つたので、前年七月、その隣接地に鐵筋コンクリート總建坪一千五百坪、

五階建、新工事に取りかゝつた。工事顧問には、建築界の大家佐藤功一博士を依囑し、工事監督に廣瀬憙六氏が當り、眼目を事務の簡便と、編輯、工場、發送の三機關の連絡におき、工を了つたのはこの年八月末日、これが現在の本館社屋で、十月十八日移轉を開始、二十日全部終了、十一月二日、創刊五十周年並に新館落成の祝賀會を擧行した。

十一月一日には、畏くも梨本宮守正王、同妃兩殿下、山階宮武彦王、同妃兩殿下、久邇宮朝融王、同邦久王兩殿下が特に台臨あらせられて、町田社長、三木社主、太田(正孝)副社長、高田知一郎氏、箕浦多一氏、三木七郎氏等諸幹部の御案内で、編輯、營業各部を隈なく御巡覽の上、本社主催の新聞寫眞展覽會、並に演奏會にも成らせられた。また同月六日には秩父宮殿下、七日には李王世子、同妃兩殿下台臨あらせられた。各宮殿下がかくお揃ひで新聞社を御訪問あらせられたのは、我國では未曾有のことで、社員等しくこの光榮に感激したのである。

この年から三回にわたり、一萬四千圓を投じて縣賞小說を募り多大の成功ををさめた。

創刊五十周年と新館の落成とを記念し、報知大學、移動圖書館、音樂の普及、文藝の奬勵、映畫教育、體育の奬勵、報知賞の制定、報知傷害無料保險等の文化的記念事業を計畫し、着々として實行した。この秋、日本自動車競走大會を創始。

、大正十二年…(九月一日、關東大地震)…

大躍進、大發展。大震災遣米答禮使を派遣。

『寫眞報知』を刊行

九月一日午前十一時五十八分關東大地震。續いて大火災起り、帝都、横濱兩大都市その他焦土と化した。

本社は、社員その他の一身を賭しての涙ぐましい努力に救はれて、社屋は幸ひにして無事。たゞ動力が斷たれ、活字のケースが全部引繰返つて印刷不能に陷つたが、謄寫版、又は手刷その他の方法で號外を發行し、焦土にさ迷ふ市民と、不安に閉された全國民に報道を續けた。

更に全社員の燃ゆるが如き愛社心と、重大なる使命の自覺とによつて、五日には二頁の夕刊を發行、十八日には八頁を發行することが出來、焦土の中に復興した最初の新聞として、市民に光と力と慰藉とを與へ、全國民に安堵をもたらした。實に帝都復興の魁として、擧社努力奮闘、發行部數も七十萬を突破し、廣告はとても載せ切れないほど殺到した。

大震災後帝都唯一の新聞…(九月五日の本紙)

九月十五日には、他に先じて『震災畫報』を出し、大震災の慘狀を一々寫眞にあらはして、不備に陷つてゐた新聞報道の欠點を補つたのであるが、これが非常に人氣に投じて、一舉に數十萬部を賣盡し、つゞいて出版部では、十月から週刊畫報として『寫眞報知』を刊行した。

大震災に際して米國民から寄せられた深甚の同情に對して、日本國民の感謝を表するため、『大震災遺米答禮使』派遣に決し、本居長世氏、同みどり孃、同貴美子孃、吉田清風氏、同恭子夫人、中村慶子孃の諸音樂家一行を米國に派し、ハワイを初め、米國各地に答禮の音樂會を催さしめた。

大正十三年…(一月二十六日、東宮殿下御成婚)…

社の組織變更。モジュヒン氏を招聘す。

八月には、社の匿名組合を改めて株式會社とし、社の基礎を盤石の上に据ゑた。

この夏、ロシアの世界的大聲樂家モジュヒン氏を招聘し、報知講堂その他において音樂會を催し、絶讃を博した。モジュヒン氏は、日本にはじめて來たバスの歌手であり、我國第一流の音樂家達は、毎會熱心なる研究的態度をもつて出席するといふ有樣で、單に大震災後の落莫たる帝都に一脈の和氣をもたらしたばかりでなく、日本の音樂界に眞に未曾有の貢獻をなすことが出來たのである。

大正十四年…(三月一日、東京放送局初放送)…

熊谷大火に傳書鳩の偉功　漢字制限の共同宣言。

通信の機敏に傳書鳩を採用したのは、我國では本社が最初である。新聞通信として、傳書鳩が認められるに至つたのは、大正十一年秋、靜岡縣下に行はれた陸軍特別大演習の時からであるが　本社は、大正十二年の震災直後、中野の陸軍々用鳩調査會から十羽だけ分讓をうけ、五階の屋上に三坪の鳩舍を設け、伊東大尉指導の下に鳩班を組織し、連日練習を行ひ小田原、箱根から約三十分、横濱から約十二分で本社へ歸り得るに至つた。この年五月、埼玉縣熊谷町の大火の際の如き、電信電話の不便を補つて、立派な役目をつとめたが、煙に包まれて死んだもの

三羽、負傷したもの一羽といふ可憐な犠牲を出した。

漢字制限は、眞つ先に唱へてこれを實行したが、東西十一社の委員が調査の末、單字二千百八字、ルビ付三千百十一字とする成案を得て、共同宣言を發表したのは六月一日であつた。

大正十五年—昭和元年

日米水上競技大會。『富士に立つ影』好評を博す。

三月、宇野浩二氏、菊池寛氏、佐藤春夫氏、里見弴氏の文壇四大家を迎へて客員となし、得意の新作長編小説を連載して紙上を飾ることゝなり、四月にまづ宇野氏の『魔の都』が連載されはじめた。

九月八日、九日、玉川プールにおいて、日米水上競技大會を催した。米軍は背泳のケアロハ、短距離のサム・カハナモク以下十名、日本軍は高石、佐田、鶴田をはじめ精鋭二十名、火花を散して相競ひ、二十六對十六をもつて日本優勝した。日本水泳界に正に一時代を劃した大會であつたことは言ふまでもない。

十二月二十五日午前一時二十五分、葉山御用邸に於て大正天皇崩御し給ひ、國をあげて哀悼の中に年は暮れた。

白井喬二氏の『富士に立つ影』は、大正十三年七月二十日から、昭和二年七月二日まで連載され、大衆文藝の最高峯として、異常の好評を博した。

昭和二年…(四月二十二日、モラトリアム施行)…

町田社長農林大臣となる。報知診療所創設。

アムンゼン氏招聘。汎太平洋水上競技大會。

大隈信常侯社長に就任。

大正八年以來社長であつた町田忠治氏は、六月若槻内閣に入つて農林大臣となつた。時あだかも、創刊五十五周年にあたり、記念事業として報知診療所を創設、新聞社の社會事業として最も民衆に切實な一生面を開拓し、また征極王アムンゼン氏を遠く北歐から迎へて、全國二十餘ケ所に講演會を開いた。

大隈信常侯

秋には東京と大阪に汎太平洋水上競技大會を開き、米國、濠洲の第一流選手を迎へ、特に獨逸からは、平泳のラーデマッヘル等を招待して、我が精鋭と白熱的競技を交へ、眞に我國空前の世界的大會を催した。

大隈信常侯の社長就任は十二月であつて、坂本三郎氏副社長に就任した。

昭和三年…（十一月十日、御即位の御大禮）…

浮世繪大展覽會を開く。『太閤記』いよ〳〵好評。

昭和新政の劈頭を飾る御大禮記念事業として、諸家の秘庫を開いて、六月六日から二十五日まで、徳川時代各派名作の浮世繪大展覽會を催した。九日の彦根屏風デーには、入場者二萬三千八百、竹の台に展覽會始まつて以來、又、府美術館建つて以來の最大入場者であつた。

矢田挿雲氏の『太閤記』は、大正十四年一月十四日夕刊から始まつたが、年一年と好評いよ〳〵加はり、あだかも本紙の代表的讀物の觀を呈し、昭和九年十二月三十日、讀者に名殘を惜まれつゝ感激の中に終つた。『徳川榮華物語』以來の長編で、足かけ十年連載されたのである。

昭和四年…（八月十九日、ツエペリン飛行船來る）…

日獨對抗陸上競技大會。式年御遷宮奉賛會。

十月、獨逸からヒルシュフェルト、エルドラッヘル、ペルツアー、シユトルツ、モレス等世界的陸上選手十七名を招いて、神宮外苑競技場に『日獨對抗陸上競技大會』を開き、日本選手では、三木義雄、西田修平、北本正路、木村一夫、齋藤眞衛、南部忠平等が各種目に優勝した。これは前記日米對抗水上競技大會及び汎太平洋水上競技大會と共に、我國に於ける國際的競技會に一新紀元を畫したものであり、今日世界の水準線上に覇權を爭ふに至つた斯界は、實にこの三大競技會によつて、刺戟と教訓とを得たるもの多しといふべきである。

十一月には、神宮式年奉祝のため、『大神宮御遷宮奉賛會』を起して、尊皇敬神の思想を鼓吹した。

昭和五年…(四月二十二日、倫敦海軍條約調印)…

野間清治氏社長に就任し、新しき大飛躍の時代に入る。第一回古式角力大會。『日曜報知』を發行。日獨親善歐亞聯絡大飛行。

六月二十七日、新たに大報知を引受けた野間社長は、五階の講堂に全社員を集め、就任の挨拶をなし、全社員感激し、大なる希望と抱負とをもつて、『清く、明るく、正しき新聞』を旗じるしとし、崇高なる新聞道の樹立を目ざして、新たなる大飛躍時代の第一歩を踏み出した。

五月、體育奬勵、國技振興の目的のために兩國國技館の本場所直後、第一回の『報知古式角力大會』を催したが、その盛觀は、今や完全に帝都の年中行事となつてゐる。

大飛躍の手はじめとして、七月から本紙附錄『日曜報知』を發行して、一般讀者に無料添附した。四六倍判の『日曜報知』は、月極讀者に對する奉仕的贈物で、立派な週間雜誌である。

八月二十日拂曉ベルリンを發した吉原飛行士は、三十日午後二時二十九分立川に安着、日獨親善歐亞聯絡の大飛行を完成、輕飛行機による世界記錄を作つた、この日代々木原頭歡迎の官民は二十萬と註された。

昭和六年…(九月十八日、滿洲事變勃發)…

『婦人子供報知』を發行。北太平洋横斷飛行計畫。報知機滿洲に活躍。

明治十九年入社以來、本社の大黒柱であつた三木善八翁は、三月十七日、池上町市ノ倉の自邸に逝去した、享年七十六。二十日、社葬をもつて青山葬場に告別式を營んだ。

三月から、月二回『婦人子供報知』を發行して、讀者に贈ることゝなつた。これは『日曜報知』と同じ型の立派な婦人並に子供雜誌であつて、家庭新聞としての本紙に添附され、錦上更に花を添へるの趣きがある。

吉原飛行士による北太平洋横斷飛行計畫は二月一日發表され、地上勤務員を乘せた第百國際丸は四月十八日芝浦を發航、横斷機『報知日米號』は、五月四日東京飛行場を出發壯途に上つたが、天運惠まれず、不測の難相つぎ、目的を達することが出來なかつた。

滿洲事變勃發するや、前後二十餘名の特派員は、酷寒の野に砲火を潛つて南船北馬、通信と寫眞撮影の任に當ると共に、報知機を出動せしめ、滿洲各地より新京或は大連へ寫眞及び原稿の空輸に活躍せしめた。

最近の五ヶ年間

昭和七年から今年に至る最近の五ヶ年間は、世界も我國も文字通り『非常時』である。內には滿洲事變につぐ上海事變、五・一五事件、熱河征戰、國際聯盟脫退、華府條約廢棄通告、北鐵讓渡交涉協定成立、滿洲國皇帝御入京、倫敦會議の決裂、二・二六事件等あり、外には西藏獨立宣言、獨逸の國際聯盟脫退につぐ軍備擴張宣言、伊太利のエチオピア侵入等あり、新聞紙の報道、批判はいよ〳〵廣汎深刻となり、その責務は益々重大となつて來た。この間における我

社の大活躍は、なほ一般の記憶に新たなところであるから、簡略に記しておきたい。

昭和七年… 三月『報知日の丸號』の名越大尉、米國にて遭難。八月『新東京八名勝』を募り、池上本門寺、西新井大師、北品川天王社、日暮里諏訪神社、赤塚の松月院、目黑の祐天寺、洗足池、龜戶天神が決定した。九月八日、新館の增築成り、十月を以て紙齡二萬號に達し、創刊六十周年記念號を發行した。九月二十四日、本間中佐、馬場飛行士、井下通信士の『第三報知日米號』が淋代海岸出發、千島上空にて遭難。

昭和八年… 三月、三陸（宮城、岩手、青森三縣下）方面に强震と津波の大慘事あり、同地方は、近年の凶作に加へて、滿洲派遣部隊の出身地でもあり、直ちに救濟金品募集をなした。八月十五日には『滿鮮版』を創始し、新たなる大陸時代に臨んで讀者の要望に應へた。皇太子殿下の御降誕を奉祝して、奉祝和歌、唱歌を懸賞募集した。また御降誕を記念して『皇太子殿下御降誕記念報知賞』を制定し、報知文化賞、報知功勞賞、報知篤行賞の三種に分ち、世の儀表、模範人物を表彰することゝした。

昭和九年… 五月、皇太子殿下御降誕奉祝記念として、梨本宮守正王殿下を總裁に戴き、『國寶重要美術品繪畫展覽會』を催した。全國三府二十二縣よりの出陳者數百五十六、

出陳點數六百六に達し、名實共に空前の大企畫として日本古美術の粹を一堂に蒐め、內外の稱讃を博し、非常時日本の人氣を獨占して、眞に異常の大成功ををさめた。四月には、大日本雄辯會講談社との共同主催にて、『全國青年雄辯選手權大會』を創始し、年々全國青年の血を沸かす重要行事となりつゝある。十月には關西に大風水害あり、直に義捐金を募集したが、近年東北の凶作うち續き、同地農村が困窮の底にあるに拘らず、やゝもすれば一般に閑却さるゝ傾のあるを慨し、天下に先んじて東北凶作地救濟の猛運動を起して、政府を鞭撻すると共に、廣く天下に訴へて義捐金品を募集した。この救濟運動はよく徹底し、本社に寄託されたる義捐金二十萬一千六百餘圓、慰問品六萬九千一百餘點に達したのである。

昭和十年…本社並に大日本バスケットボール協會招聘の米國籠球チーム、アンダーソン監督以下九名の一行は、五月六日來朝、我が代表チームと東京をはじめ各地に轉戰、斯界に不滅の功績を殘すと共に、國際親善に寄與すること多大であつた。第二回國寶重要美術品展覽會も世人愛惜の裡に大成功ををさめた。五月二十一日朝刊では、滿洲國鄭總理以下政府首腦部の辭任と、張景惠氏の新總理就任を獨占報道し、新聞通信界に一大衝動を卷き起した。蓋し外國の政變を、かくの如く鮮かなる特種として報道掲載したのは、世界通信史上まれに見る偉

觀で、我社編輯陣と通信網の實力を表示した快事であつた。八月三日創始した『商賣往來』欄は、本紙の特長を發揮したものとして、大いに讀者に喜ばれてゐる。

この夏、創設された『國際觀光ルート』は、單に國際的ばかりでなく、國民保健上、思想善導上からも、國內觀光客を奬勵して神社佛閣をも參拜せしめ、一方、地方資源の開發にも便ならしめるといふ事をも考慮に入れて、鐵道省運輸局の贊成と、日本旅行協會（ジャパン・ツーリスト・ビユロー）の協力を得て決定されたもので、內外觀光客と地方民を喜ばしたばかりでなく、『國際觀光ルート五千哩の旅』の記事と寫眞とを以て紙上を飾つた。

昭和七年『第三報知日米號』遭難以來滿三年を經過したので、十二月に、昭和六年以來の太平洋橫斷飛行經過一切を紙上と冊子とを以て報告し、名越大尉、本間中佐、馬場飛行士、井下通信士等、殉職奉公の英靈を弔ひ、大方海嶽の御同情を拜謝した。飛行計畫に要した本社支出金五拾七萬五千四百餘圓は、野間社長特に懇請して、之を個人として寄附致したき旨申出でられ、本社は其の意を容れて、右全額の寄附を受け、同時に、本社は民間航空振興奬勵のため、民間航空事業の母體たる帝國飛行協會に、金拾五萬圓を寄附したのである。

昭和十一年…二月一日、『東京版』と『報知グラフ』が創始された。『東京版』は、

東京市民への特別の奉仕として喜ばれ、『報知グラフ』は、觀る新聞として、毎朝清新にして興趣ある紙面を提供し、我國唯一の日刊グラフとして、讀者の絶讃を博してゐる。二・二六事件に際して、斷然他紙を引離した本社の驚異的活躍と、活氣横溢、潑剌無礙の大紙面とが、滿天下の認めて以て『新聞は報知』との定評を得たるは喋々を要せざるところ、果然發行部數はいよ〳〵激增して、一層の目覺しき大發展をみるに至つた。かくしてこゝに、六月一日、第二萬一千三百四十四號を重ね、創刊六十五年の記念日を迎へたのである。

現況の概要

本社の重役は、取締役は社長野間清治氏、副社長寺田四郎氏、三木七郎氏、久間九郎氏、赤石喜平氏、須崎芳三郎氏、監査役は三浦勝太郎氏、高木義賢氏、顧問は侯爵大隈信常氏である。局長は、總務局中村唯一氏、編輯局廣田四郎氏、工務局三木七郎氏（兼務）である。

本社現在の敷地は、總計一千四百〇二坪餘、建物は二千六百二十五坪餘（飛行機格納庫を含む）。社内の機構は、總務、編輯、營業、工務の四局に分れ、總務局に庶務、會計、用度、企畫、安信の五部、編輯局に論說、統一、考査、政治、經濟、社會、通信、外報、調査、學藝、運動、寫眞、校正の十三部、營業局に、販賣、廣告の二部、工務局に監理、活版、ステロー、印刷の四部、外に附屬事業として報知診療所があり、配するに三千の社員を以てし、日夜活動を續けてゐる。近時特に充實をみたのは編輯、通信その他の社務に

飛行機を活用すること…であつて、昭和十年春落成した羽田東京飛行場の本社格納庫は、敷地四百三坪、總坪數百八十三坪餘のドウム型の近代裝で、ユンカースA五〇型（八〇馬力二人乘）二機、オイローパ號（三〇〇馬力四人乘）一機が、スハといへば、いつでも飛出せるやう待機の姿勢をとつてをる。本社の飛行機は、前記昭和六年の滿洲事變に引續いて、七年八月、上海事變の寫眞を大村飛行場から東京飛行場へ輸送して、號外戰に勝を制し、八年二月の熱河作戰に參加、寫眞及び記事を奉天と京城へ空輸、九年三月の函館大火災に際しては、原稿を仙臺飛行場より東京へ空輸、九月には、利根川大洪水につき群馬、埼玉、千葉、茨城縣下利根川流域寫眞の撮影、十年十月の朝鮮の施政二十五年記念に當り、京城訪問祝賀飛行等、幾多の華々しき活躍をなしてをる。

野間社長就任以來『清く明るく正しい新聞』を旗じるしとし、『崇高なる新聞道の樹立』を目指していよ〳〵紙面を刷新充實、あくまで讀者本位の一途に邁進し、月四回に亙つて『日曜

報知』と、『婦人子供報知』の別冊二大附錄を添附したのを初め、大小幾多の破天荒なる讀者奉仕を引續き實施せる結果は、一年を出でずして完全に

發行部數の倍加といふ…大飛躍を遂げ、萬人の驚嘆するところとなつた。殊に本年に入つては、先般の二・二六事件以來、本社報道陣の大活躍と販賣店の目覺しき活動とに依つて、人氣はいやが上にも高まり、讀者增加の門戸たる卽賣界の賣行が、俄然三倍（事件當時は十倍餘）といふ驚異的激增を示し、同時に一般讀者も稀有の激增を呈し、實にその盛況は新聞始まつて以來の一大記錄を作つた一事によつても推すことが出來よう。爾來、引續きこの好調の波に乘つて、社內一同猛然奮起、ことゞくに本紙の眞價を發揮し、販賣作戰に成功し、一方又最近改正せられたる販賣制度は、販賣店の活動能力に拍車をかけ、今や

日本一の大報知を目指…して邁進してゐるのである。卽ち日一日と紙面の刷新を圖つて本年春『東京版』と『報知グラフ』との創始を斷行して斯界の先登を切り、朝刊十二頁、夕刊四頁——毎日十六頁を發行してをるが、重大記事の幅輳と廣告の激增とのため、しば〳〵增頁を行はねばならぬ。更に、全國讀者の要望を滿すために、岩靑、北海、千葉（A、B、C）中京、北陸、宮城、新潟、長野、埼玉（A、B）福島、山形、秋田、遠州、駿豆、山梨、茨城、

群馬、栃木、神奈川（A、B）特に『報知グラフ』添附）、武藏等

二十四の地方版を發行…してをる。從つて本版と地方版とを通じて　通信網の充實には最も意を用ひ、通信部は、全國各地にわたつて特派員、通信員を配置し、外報部の統轄する滿洲國、支那、歐米各地の特派員、ロンドンのモーニング・ポスト社との通信特約と相俟つて、內外に亙る强力通信網の完備を期してをる。かくの如く、發行部數の激增と紙面の膨脹とに伴ひ最近の工場設備は愈々充實した。本社が大正十四年に獨逸アルバート會社製の一時間印刷能力八萬枚のドイツ製超高速度輪轉機（四臺）、しかも二階式になつてゐるのを入れた時には、その壯大なると、その高速度は、新聞界驚異の的となり、その後これに幾多の改良を加へ、より高速度の東京機械製作所製純國產超高速度輪轉機（二臺）を入れ、更に昭和六年末、世界各國の最新式輪轉機の持つあらゆる特長を參酌し、本社多年の研究を加へて、最も理想的な世界一と折紙つきの純國產報知式超高速度輪轉機（三臺）を增設した。本機は實に

一臺一時間十五萬枚の…印刷能力をもち、新聞印刷界に革命來るを叫ばれた優秀精巧な機械である。この機械は地下室の紙庫のストーンリール（卷取自動繼紙機）により、運轉を中止することなく、次々と何本もの紙が連續して印刷される。また印刷開始後突發事件を報道する

ため、版面を取換へることなく、異色の二重刷を以て、そのニュースをどの頁にても刷込めるやう、全體の機械にレーテスト・ニュース・デヴァイス（最新記事刷込裝置　がしてある。本社の新聞用紙は一本で新聞二萬五千枚をとれるやうに卷紙がなつてゐる。本社の朝刊（市内版並びに廿四種の地方版を含む）及夕刊に使用する活字は、印刷の鮮明を期するため、一回の使用毎に新しい活字と取換へられる結果

一日使用活字四十萬個…この新活字を鑄造するために、米國製トムソン式自動鑄造機獨逸製ステムペル自動鑄造機、池貝製トムソン型自動鑄造機、カスティング、計十五臺の鑄造機を設備し、就中自動鑄造機は、一臺一分間百二十本乃至百五十本の新活字を間斷なく造つてゐる。更に昨冬、活版部の大組作業場が一新され、重量大約十五貫もある大組版の取扱及び大刷方法に、全く獨創的にして、業界の最新式たる設備を完成した。言ふまでもなく

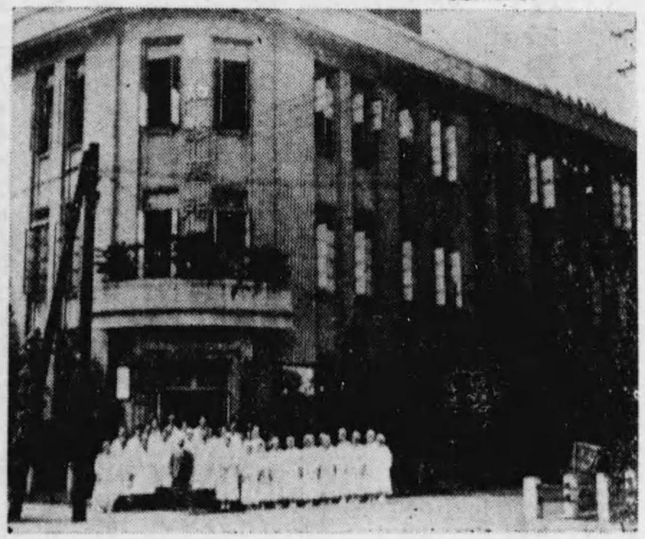
廣告は新聞の信用勢力…を切實に反映するものであるが、最近本社廣告部の活躍は目覺しいものであつて、それこそ躍進また躍進の有樣、日に月に廣告主の範圍を擴大し、廣告行數の累增を見せてゐることは周知の事實である。いま日本電報通信社の調査發表によれば、昭和十年下半期即ち六月から十一月までの普通廣告行數合計は、二百六十八萬四千七百七十行で、これを前年同期の二百四十三萬三千二百四十行に比較すれば、二十五萬一千五百四十行の增加であり、また同期の案内廣告行數合計は三十七萬四千百五十行で、これを前年同期の三十二萬一千八百七十行に比較すれば、五萬二千二百八十行といふ激增である。更に日本電報通信社調査によれば、本年三月中の廣告掲載行數が、二・二六事件の影響を受けて、他の有力紙は十餘萬行減といふ著しき不成績を示してゐる中に、獨り

本社のみ約二萬行增加…を見せてゐるのは、近時の本社の目覺しい躍進を如實に現してをるものである。かくの如き大躍進、大發展の中に、創刊六十五年の記念日を迎へた本社は、野間社長の下に、三千の社員同心一體となり、『讀者本位』を信念として、『清く明るく正しい』崇高なる新聞道を一路邁進し、更に遠大なる大飛躍を期してをるのである。

報知診療所と安信部

本社の附屬事業たる

報知診療所…は、昭和二年十二月、恰かも報知新聞が、創刊五十五周年を迎へたに就て、その記念事業の一として計畫したもので、一般大衆の家庭の惱みであるのみならず、重大視すべ



（位置）…麹町區有樂町二丁目七番地
（電話 丸ノ内三八二一）
省線「有樂町」下車
市電「數寄屋橋」

報知診療所の各科擔當醫師は左の如くである。
（昭和十一年五月現在）

内科	（所長）醫學博士	柳澤贊治
	醫學博士	中山喜美雄
	醫學博士	千葉俊夫
外科	醫學博士	寺田廉
皮膚科	醫學博士	山田菊雄
泌尿器科	醫學博士	織田良一
産科	醫學博士	小林種樹
婦人科	醫學博士	中山喜美雄
小兒科	醫學博士	千葉俊夫
眼科	醫學博士	大木健治
	醫學博士	松岡喬
耳鼻咽喉科	醫學博士	田村弘隆
	醫學博士	田久保茂樹
齒科	日本齒科醫學士	森成章
レントゲン科	醫學博士	中山喜美雄
	醫學博士	千葉俊夫

き社會問題である醫療費の輕減を圖ると同時に、各專門醫師を一堂に集めたる綜合診療の社會化を目標に開設したものである。現在の診療科目は、内科、外科、皮膚科、泌尿器科、産科、婦人科、小兒科、眼科、耳鼻咽喉科、齒科、レントゲン科の十一科に分れ、各科に斬新なる醫療器械器具を整備し、擔當醫師は、現在十名の錚々たる醫學博士と、二名の醫學士で、何れも臨床の經驗に富み、力量に於て定評のある練達の士である點から見れば、餘程の大病院にも匹敵すべき内容を持つものといひ得る。且つ又近年簇出せる所在診療所とは全く類を異にせる唯一無二の模範的診療所と評せられて居る。前述の趣旨で、診察料の如きも初診に限り金壹圓、而も各科共通、その上六ヶ月間有效といふ是亦類似なき制度を採つて居り、一方藥價處置料も、醫師會の規定に許される最低限度にしてあるので、その低廉なこと言ふまでもなく、之がため世間の信用と評判は彌が上に高まり、各種患者殺到、醫界驚異の存在となつてゐる。尚、當診療所に於ては、年々歳末に細民救濟のため、莫大の犧牲を拂つて歳末無料診療を施行したり、屢々行はれる本社の各種催し事などの際は勿論、防空演習其他の場合にも、隨時救護班を出動させたり等、社會事業にも微力を盡して居る。また本社の

安信部…は明治三十三年の創設であつて、爾來四十年、多數の部員は幾多の實驗と驚くべき

精勵と相俟つて、結婚調、信用調、身許調、學生調の諸探偵を仕遂げ、又、各家庭に起つた椿事、變事、出來事の處分を解決して來た。凡て探偵調査の必要なるは、戰前に斥候の必要なると少しも變る所がない。斥候に兵卒の斥候と將校の斥候とあるが如く、探偵調査にも一偵、二偵、三偵の方式があり、此の報告に基いて世の中を渡れば『石橋を叩いて渡る』よりも寧ろ手堅く、單に探偵の名に恥ぢて、此の有利有益の機關を忘れるのは、猶ほ斥候を卑怯とするに似て、大失敗、大失策を醸さねばならぬであらう。實に善良なる秘密探偵調査は、潔白なる親類も同樣である。本社安信部の秘密調査は、婚姻、信用、學生、その他のあらゆる事項にわたり、多年の經驗と誠實とにより絶大の信用と信頼とを博してをる。

記念事業

本社創刊六十五年に當つて、光輝ある歴史を回想し、更に多望なる將來への發展を目指すに際して、時代の趨勢と新聞紙の使命とに鑑み、いさゝか國家社會に貢献せんことを期し、左の如く五大記念事業を計畫し、着々實行してをる。

一、露滿國境踏査並に警備隊及移民團の慰問隊派遣。

目下風雲穏かならぬ露滿國境の眞相を調査して、國民に報道するため、國境踏査隊を派遣し、記事に、寫眞に、トーキーに、その實相をあまねく國民に紹介するのみならず、日夜警備の重任に當れる軍隊に映畫を觀覽せしめて慰安するため、東京より特に映寫機械と發電機とを携行せしめた。しかして單に軍隊ばかりでなく、全國各地から送られて、北滿に勇ましく新天地を開拓しつゝある同胞移民をも、視察慰問せんとするものである。

二、在滿皇軍並に同胞移民の慰問袋大募集。

滿洲國と我國との不可分關係はこゝに言ふまでもなき事、實に滿洲國は東洋平和の礎石であり、我國の生命線である。この生命線を守る皇軍の勞苦、同胞發展の第一線たる移民團の奮鬪に對しては、國民は片時も、感謝の念、激勵の心を忘れたことはないが、しかもその實際的慰問については、近時やゝ閑却されんとする憾なしとしない。本社はこゝに國民の注意を喚起して、慰問袋の大募集を全國的に行ひ、在滿の軍隊と同胞移民とに贈ることゝなり、陸軍省と拓務省とは本社の趣旨に贊し、種々の便宜を與へられることゝなつた。全國民より集まれる愛國の熱誠ほとばしり、濕情こもれる慰問袋に接しては、我等の軍隊、我等の同胞は、必ずやその苦勞、奮鬪の地において、勇氣百倍、愉悅の情を禁ずることが出來ないであらう。

三、『報知トーキー』の配給。

東亞發聲ニュース映畫製作所と提携して、文化的、教育的、科學的、ニュース的な社會萬般あらゆる方面の實相を捉へた短篇映畫『報知トーキー』を製作配給することゝした。『報知トーキー』について、本社の最も誇りとする所は、世界最優秀の稱あるウエスタン・サウンド・システムによつて製作されることである。およそ一國文化の進展において、ニュース映畫の影響の如何に重大性を有するかは、今更多言を要せざるところ、本社は、清新なるニュースと滋味深き短篇の文化映畫を製作して、『耳と目の新聞』として、國民の生活と教養との上に精神的糧として幾分の寄與を爲さんとするものである。

四、南方問題調査會の設置。

我國南方政策の重要性は愈々切實となりつゝある。南の生命線——裏南洋、表南洋から起り來る種々の問題は、日本國民として最も認識を深くせねばならぬ時代となつて來た。國防上は素より、外交、經濟、學術の上から見て、無數緊要の大問題は日本國民の前に横はつてゐる。南へ、南へ、——本社は南方問題に關する朝野の權威を網羅して、南進國策の永久的講究をなすと共に、特派員を派して實地を踏査せしめ、南方市場の視察、講演會の開催、調査報告書、パンフレットの刊行等により、同胞南進の參考指導と、我が南方商權の擴張擁護に資し、以て我が國策のため幾分の貢献を爲さんとするものである。

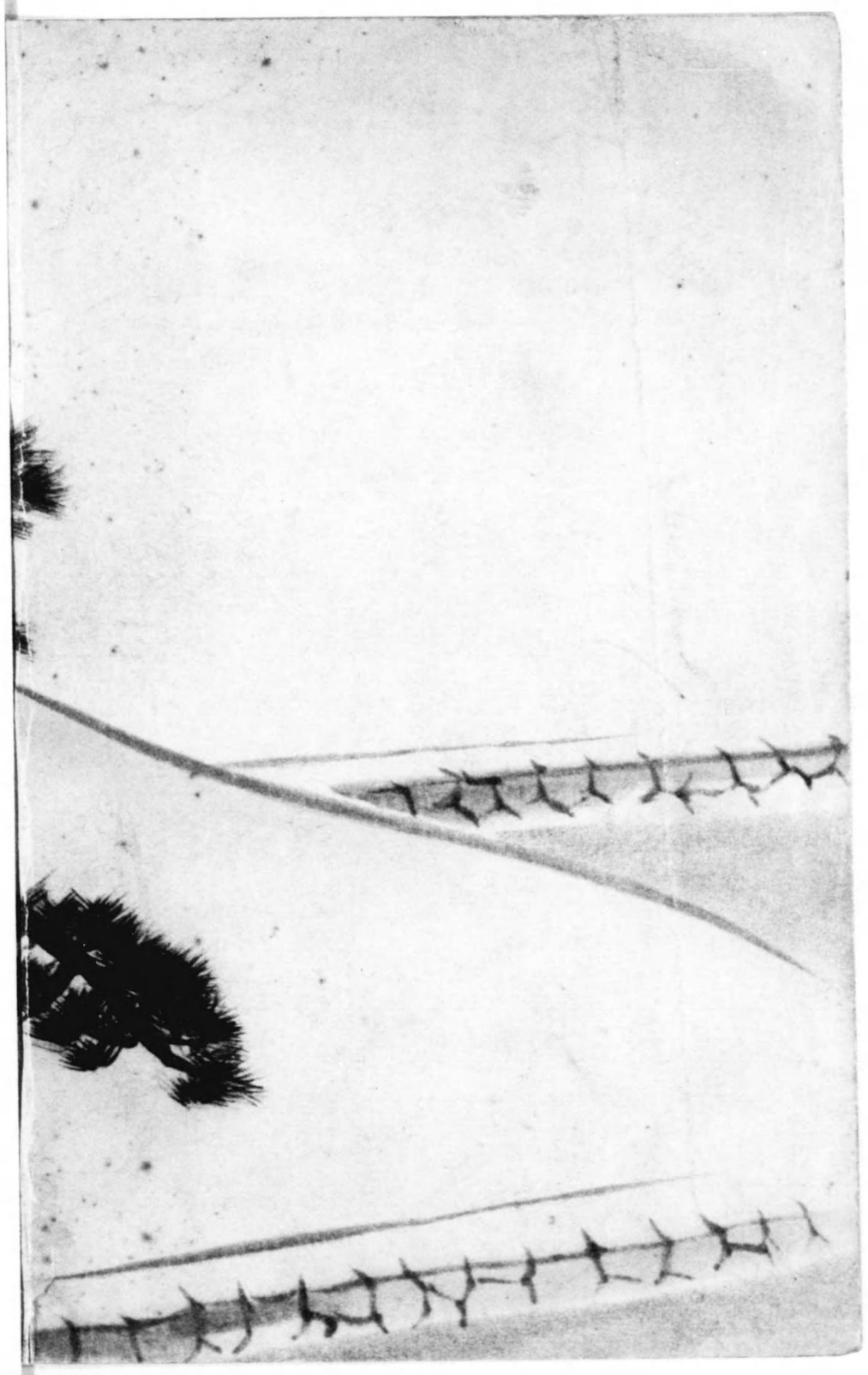
五、『東京府觀光十二ヶ月』の設定。

大東京市民の保健衛生の上からも、市の繁榮の上からも、是非とも新しい觀光地を選定して、世に紹介するの緊要なるを思ひ、東京府觀光協會と協力し、東京府市民のために名勝地を指定することゝなり、その名勝地の持つ自然の景色に配するに年中行事を以てし、季節を考慮に入れて、十二ヶ月　名勝地を選定するのである。而も極めて大がゝりな方法により、一般の大衆と共に之を選定しようとするのであるが、東京府の名勝は、『東京の名勝』であると共に、『日本の名勝』たるは言ふまでもない。

昭和十一年六月二十日印刷
昭和十一年六月二十五日發行

（非賣品）

東京市麴町區有樂町一丁目十三番地
發行兼著作人　青木武雄
東京市麴町區有樂町一丁目十三番地
印刷人　日永悌三
東京市麴町區有樂町一丁目十三番地
印刷所　株式會社有恒社

發行所　東京市麴町區有樂町一ノ一三　株式會社報知新聞社

終